ザ・スリープ

吉川　猛

田村学には秘密があった。それはふとした機会に笑い話として打ち明けてしまえる、けれどいざ話そうとすると口をつぐんでしまう秘密だった。

その兆候が初めて現れたのは、今から思い起こせばおよそ二か月前の六月半ばの土曜日、その後ゆっくりと起きていった変化がなければ、どこからどう見ても何の変哲もない一日だった。

強いてあげるなら大井芳樹が部屋に来たこと、けれどそれも今年になってから月に一度か二度はある週末の出来事だった。

大井芳樹がデパ地下で買ったお惣菜数種とワインを持って現れたのもいつもと同じ、それらを冷蔵庫にしまうと二人でレンタルＤＶＤショップへ出かけたのも一緒だった。

部屋にもどるとテーブルの上にお惣菜のパックを広げ、いよいよ白ワインのボトルを開ける段になって、栓抜きがないことに気がついた。

「キャップ式にしなかったの？」

テーブルにがっくり肘をついて学がいうと、

「文句を言う前によく見ろ」

大井が瓶をグッと近づけ表側のラベルを指差した。そこにはフランス語らしき流麗な文字で銘柄が記され、それが有名であることが大井の態度から推測できたが、田村学は首をひねった。さらに大井がクルッとボトルを半転させると裏側のラベルの上方に「５０％オフ」の赤いテープが斜めに貼られていた。

ワインオープナーを買いに行くのも今さら面倒で、結局ドライバーとペンチを駆使してボロボロにコルクを崩しながら何とか引き抜いた。

やっと乾杯になった。

「味といい香りといい、やはり奥行が違うなぁ」

コルクの屑を吐き出しながら大井がいった。

「七百円のワインでも同じこと言ってたな」

同じくコルクを灰皿に吐き捨てながら学がいった。

二人ともテレビに目を向け無表情にそう言い合いながらもそれら一連の紆余曲折を愉しんでいる、それもいつもと同じだった。

大井芳樹が田村学の部屋を定期的に訪れるようになったのは、昨年末さるホテルのレストランで開催された高校の同期会がきっかけだった。同じクラスだったのは一年生の時だけ、その当時もほとんど言葉を交わした記憶のない二人が意気投合したのは、三次会のカラオケボックスでだった。

ほぼ全員が泥酔状態のなか、誰もが身もフタもない結婚生活や恋愛話、不倫話を披露するなか田村と大井だけがつい最近離婚したことを打ち明けたからだった。それ以来月に一度か二度、週末にポッカリ空いた寒々とした時間の穴を互いに身を寄せ合うことでなんとかやりすごしているのだった。

九時になって衛星放送の『釣りバカ日誌』が終わると、

「じゃ、そろそろいくか」

田村学がＤＶＤプレーヤーに借りてきたディスクを投入した。無断で複製すること等を禁じる警告画面のあと制作会社の華々しいロゴが現れると、すぐに粗雑な画面が映し出された。

『ザ・スリープ　戦慄の扉』

おどろおどろしい音楽とともにタイトルが表示されたあと、カメラは闇に灯る大きな邸の窓をクローズアップした。

短い回想シーンをつなぐ形で、アメリカ地方都市のごく一般的な家庭像が映し出される。

華やかさには欠けるものの、身心ともに満ち足りた豊かな生活。優しく教養豊かな父母、

愛らしい妹。それらに囲まれた少年マックスは何自由なく、すくすくと育つのであった。
だが十六歳を迎えた頃、ひとつの杞憂が少年の胸に兆した。
夢が――ほぼ毎晩のように眠ってから見る夢が、あまりに鮮明なのである。しかもそれが連続ドラマか長大な映画を見るようにはっきりと筋がつながっているのだ。
「そんなことはたまにあるよ」
ハイスクールの親しい友人デイヴにさりげなく相談してみたところ、にべもなくあしらわれてしまった。
だがその後も夢は着々と、まるでもう一つの人生を生きるかのように彼の成長に合わせ時を刻んでいった。夢の中のもう一つの生においてもデイヴや何人かの知人、それに彼の親しいガールフレンド、リンダ・リーは名前と立場を変え登場していた。
現実にも増して平和な夢の町に突然恐ろしい転機が――町の住民たちが謎の死を遂げはじめたのである。そしてある日とうとうデイヴも命を落とす。
しかも驚いたことに翌朝目覚め登校したマックスは、デイヴが前の晩自室にて惨殺体で発見されたことを知らされるのである。
一人一人夢の中で殺され、現実世界でも死体となっていく周囲の人たち。徐々に明らかになっていく夢と現実を股にかけた悪の秘密結社。
そこに至ってようやくマックスは自分自身の使命に気づかされる。彼こそは夢の世界で驚異的な身体能力を駆使し、人々を魔の手から救うヒーロー『ザ・スリープ』なのだと。
果たしてマックスは愛するリンダ・リーを魔の手から護り、世界を悪の力から解き放つことが……？
その後のマックスの活躍を知ることは学にはなかった。彼自身が眠りに落ちてしまったからだ。回りはじめた酔いや平日に蓄積された仕事疲れのせいばかりではない。
あまりにおざなりの状況設定、ご都合主義のストーリー展開、紋切り調のセリフ、精彩を欠く無名俳優たちの演技、何より観る気をそぐのはそれが映画通ならずとも誰もがよく知るさる有名なホラー映画の人気シリーズのアイデアをあからさまに盗用しているからだ。
それでも浅い眠りのなか感覚のどこかで学は映画を鑑賞しつづけ、醒めた意識の薄膜を透して映画の断片が流入し、彼自身の夢と混ざり合っているようだった。はっきりわからないが何者かに追われ、必死に逃げ続けるのだがとうとう捕まり、背後から鼻と口を塞がれあえいでいた。あまりの息苦しさにもがき続け、水面に向け伸び上がろうとするように必死に手足をバタつかせていると瞬間息が通り、パッと目が開いた。
額が重い石の下敷きになったみたいに圧迫されている。そこから灰色がかった棒状のものが見慣れたリビングの床に向け斜めに伸びていた。乱暴に払いのけると太い灰色の棒、コットンパンツに包まれた大井芳樹の脚は床の上に落ち、ピクピク痙攣していた。
何事かうめきつつ目を覚ました大井は寒そうに腕を擦りながら首を起こし、
「最後はどうなった？」
ときいた。
首を振った田村学は雑魚寝していたテーブルの脚元から身を起こし、イスに座った。テーブルの上にはワインの空き瓶や飲みかけのウイスキーが溶けた氷で薄まったグラス、皿の上で水気を奪われ昨夜よりこわばった様子のチーズや餃子、揚げ物の類がカーテンごしの朝日にうっすら浮かんでいた。
点けっぱなしのテレビはＤＶＤのメニュー画面が真ん中の枠内でそこだけ動いている映画のクライマックスシーンを何度も繰り返していた。その映像に見覚えはなかった。
二人のうちどちらかがヴォリュームを下げたのだろう、低く流れるサウンドトラックは何時間も同じ旋律をループし続けたはずだ、その時テレビを地上波画面に切り替えても耳のどこかで鳴り続けていた。
あいかわらず大井は床の上で不自然によじれた体勢のままだらしなく横たわっている。その様子を見るともなく視野に収めながら、なぜかしら懐かしいような、久しぶりに大井

と再会を果たしたような妙な気分に田村学は包まれた。それにしてもまるで一晩中歩き続けたような、体の奥からこんこんと湧き出るこの疲れはいったい何だろう？
その時うっすらと半目を開けた大井はテレビの方を向いたとたん、アッと声を上げ跳ね起きた。
「何？」
ちょっとだけ驚いて学がきくと、
「もうこんな時刻か！……十一時に迎えに行くんだった」
聞けば月に一度会う子、今は元妻の実家に暮らす十歳の息子にゲームソフトを買う約束らしい。
驚くべき速度と俊敏な動きで床に散らばった携帯や財布、タバコ、ライターをリュックに投げ込んだ大井は
「じゃあな」
といって田村の背後を通り過ぎた。
靴を履きドアノブに手を掛けた大井がふと動きを止め、振り向いた。
「そういえばお前、さっき俺の夢に出てこなかった？」
真顔でそう言った大井に答える気もなく、学はぞんざいに手を振った。
リビングにもどるとテーブルの上の包装紙やフードパックを分別してゴミ袋に入れ、食べ残したお惣菜を一つの皿にまとめ、ラップをかけて冷蔵庫にしまった。残りの食器を流しに置き、水を張りながら思った。
おそらく大井は夢の中で映画の主人公そのものになり、夢の成り行きは映画のストーリーと渾然一体となり、その中に田村も出てきたのだろう。『ザ・スリープ』の陳腐な筋立てが眠っていた大井の夢の世界をも領し、その中の登場人物の一人として自分が組み込まれていたことに、うんざりあきれるばかりだった。
それにしてもわざわざ帰る間際にそんなことを伝える必要がある？　まるで中学生みたいに、生活そのものがまだ夢のオーラにぼんやり包まれていた一年生か二年生みたいに。
――そんなことだから職場では後輩でさえ自分のことを取るに足らぬ人物とみなしていることを隠そうとせず、妻とは新婚当初の蜜月もつかのま、もはや仮面のように貼り付いた硬い表情に時折浮かぶ微笑は冷笑でしかなく、エステサロンでバイトを始めたのも夫と顔を合せたくないという理由のためだけ、あげくの果てそこの男性店長と――
などといつのまにか田村自身の身の上へと話は変わり、またしてもくよくよ述懐しつつテーブルを拭いていると、ふとある見慣れないものが目に留まった。黒縁眼鏡だった。百円ショップのパーティーグッズコーナーに売っていそうな安易な作りで、実際掛けてみると度が入っていなかった。大井の忘れ物にちがいない、あとでメールしようと思いそのまま忘れた。そしてその日はそれ以外特に何も起きなかった。

それから三ヶ月足らず経った今、田村学はあの日の夜から朝にかけて感じ取った微かな、けれどそれまで味わったことのない違和感をどうしてもっと真摯に受け止めなかったのかと悔やみきれずにいた。
最初のうちはただの思い過ごしだと思っていた。あるいは離婚以来摂り過ぎているアルコールによるものだと思っていた。
異変はほぼ隔週で立て続けに起こった。翌朝食べるために買っておいたチーズケーキが忽然と冷蔵庫から消えている、買ったおぼえのない香りつき柔軟剤を洗濯機の横で発見、まだ半分以上残っていたはずの綿棒がごっそり減りゴミ箱をのぞいても見当たらない……。
ある朝まるで季節外れのサンタクロースみたいに、枕元に小さな白クマのぬいぐるみが置かれるに至って、田村学は事態がただならぬことを知らされた。
その日仕事から帰ると夕食を摂るより先にまずスマートフォンを開いた。『若年性認知症　症状』で検索してみた。学のような三十代前半の男にも決して稀ではないことを読み、

焦りとともに記事に引き込まれていく。
いくつかのサイトに書かれている症状『仕事に集中できない』『お金を使いすぎる』『部屋の中が雑然としている』などは確かにあてはまっていた。だがそれは半年来の失意のなか培われた生活習慣であって、病気の症状ではないはずだった。
そこで紙とペンを用意し、採点式のさらに詳しいチェックリストを試してみた。
Q：サイフやカギなど物を置いた場所がわからなくなることがありますか？
A：ときどきある。
Q：バスや電車、車などを使って一人で外出できますか？
A：問題なくできる。
Q：今日が何月何日かわからないときがありますか？
A：ほとんどない。
Q：言おうとしている言語が、すぐに出てこないときがありますか？
A：ときどきある。
結果は十三点、二十点以下なのでセーフだった。他のサイトでもテストしてみたが、標準より高いものの、いずれもクリアした。
数日後、今度は一つしかないフライパンが姿を消した。それは結婚以前から愛用していたものでテフロン加工が剥がれ、そろそろ買い替えようと思っていた矢先だから粗大ゴミで捨てる手間と費用が省け助かったものの、これまで消失したもののうちで容積としては最大であった。
その夜消灯し頭から被った布団の中で瞼を見開いたまま、学は病院へ行く決心をした。
土曜日でも診察している神経内科のある医院を調べ、その週末出かけることにした。開いている外来の受付はほとんどなく、ＪＲから私鉄、路線バスへと乗り継ぎ、一時間半余りで最寄りのバス停に着いた。
大小さまざまなマンションに各種チェーン店が挟まる街並のなか、学はスマートフォン片手に拡大した地図を参照しながら目的地を探した。非常に簡単な地図だったので目指すマンションにはなかなかたどり着けなかった。受付終了の十時半が迫る頃、ふと見上げたマンションの窓に診療所名が貼ってあるのを見つけた。
いくぶん老朽化したエレベーターに乗り、四のボタンを押した。横揺れを伴う超低速で上っていく。
四階に着くとひんやり淀んだ空気のなか狭い廊下を曲がり、『ひまわり内科クリニック』とプレートの付いたドアを押した。
真正面にカウンター状の細長いテーブルがあり、その後ろに擦りガラスの衝立が置かれ部屋を二分していた。壁は薄いレモンイエローで統一され一見爽やかさを意識させたが、最初から薄いのか色褪せたのかあいまいだった。
右手前の壁際に大きな水槽があった。中ではグッピーなど色とりどりの熱帯魚が泳ぎ回っていた。
――元気な魚たちだなあ。エサ、それとも水質がちがうんだろうか？――
学は近づくと前屈みにしゃがんだ。よく見ると水中所狭しと回遊しているのはどれも半透明なプラスチックの電動魚だった。
その時衝立の後ろで人影が動いているのに気がついた。まもなく現れたのは黒いレース地の服を着た背の高い女だった。
先に来た患者だろうと思い軽く会釈した学に、
「今日はどうしました、初診ですか？」
女は言った。よく見ると手には畳んだ白衣が、もう片手には真っ赤なケリーバッグを握っていた。
学がうなずくと、看護師らしき女は壁の時計を一瞥し、カウンターを目で指すと、
「急いでそこの問診票に記入し、保険証といっしょに横のボックスに提出して下さい」
一見四十前後にみえるがよく見ると三十前後であろう女の顔には苛立ちと落胆の色があ

りありとうかがえた。女はいったん背を向け、衝立の後ろにさがるのかと思いきや、学に相対するかのようにカウンター越しに仁王立ちになった。
学はあわてて備え付けのペンを持ち、問診票に走り書きすると箱へ投げ込み、サイフから出した保険証をその上に載せた。
「しばらくお待ちください」
冷え冷えとした棒読みでそう言うと、黒い服のあちこちに付いたゴージャスなフリルをヒラヒラさせながら衝立の後ろに消えた。
呆気にとられ何事が起きたのかと頭を整理するうち、だんだんとさっきの看護師の女への不満が首をもたげた。
やり場のない鬱屈を募らせていると、天井のどこかに取り付けたスピーカーから、
「田村さん、右側奥の診察室にお入り下さい」
ひび割れた音声が聞こえた。
学は衝立の横をすり抜けた。そこにはベッドや血圧計、体重計などごく一般的な内科にある医療機器が狭いスペースを雑然と埋めていた。
右側の「診察室」と書かれたドアをノックし、「失礼します」と言って中に入った。
学が腰掛けるより早く、
「物忘れがひどい、そういうことですか？」
机の前に座った医者は学の方へは一瞥もくれず、パソコンに向かって文字を入力しながら言った。さっきの看護師がその背後に立ち、微笑みさえ浮かべてその様子を見ていた。いつのまにか黒ドレスの上に白衣を羽織っていた。
「まあ一口に言えば……でもしかし」
学はこの三か月にわたる顛末を語り出した。
室内にはバロック音楽が流れていた。机の上にはパソコンの他に医療関係の書籍、学会や他の病院から届いた書類の束、それにもまして重厚な四面式のＣＤラックにクラシックのＣＤがぎっしり詰まっていた。
話に熱を帯びながらも、学の目は次第に医者の顔に釘付けされていった。どこかで見たことのある顔……そうだ、香港のアクション映画だ。主人公とは旧知の仲、たえず足手まといになりながら、肝心なワンポイントで命を救うコミカルな名脇役。
大きすぎる鼈甲縁のメガネ、どれも丸っこく可愛らしい目鼻立ち、赤ちゃんみたいにスベスベした、青い静脈が透けてみえるピンク色の肌、同じく赤ちゃんみたいに薄い頭髪、オールバックに撫でつけているため生え際の後退がよけいに目立つ。
「ではこれから言うことをよく聞いて下さい」
医者はクルッとイスを回すと、学と膝を突き合わせる恰好になった。
「今から一つのアドレスを紙に書いてお渡しします。ご自宅に帰ってからパソコンあるいはスマホでそのサイトをダウンロードして下さい。これは非常に権威ある認知症のチェックシートです。ただし、だからといって考えすぎてはいけませんよ、直感でどんどんスピーディーに答えていって下さい。いいですか、ここが肝心なところです。
全問答え終わったら答案用紙をメール添付して当院まで送信して下さい。
今日はここまでにしときましょう」
学は驚いて、
「何か科学的な機器を用いた検査をしてもらえないのでしょうか？」
立ち上がろうとしていた医者は座り直し、
「ＣＴ撮っておきます？」
学はさらに驚き、
「あるんですか！」
「もちろん当院にはそんなスペースはありません。どうしてもとおっしゃるなら紹介状をお出しする、ということです」
ぜひお願いしますと学は言った。まだまだ言い足りないことがある気がしたが、いざ言

葉にしようとすれば何も出てこず、すでにパソコンを落とそうとしている医者や片付けを始めた看護師をみると立ち上がるしかなかった。
礼を言ってドアノブに手を掛けた学を医者が呼び止めた。
振り向くと白衣の紐を首から外そうとしていた。すでに黒いドレス姿にもどった看護師は胸に黄色いコサージュを付けるところだった。
「今日はよんどころない用事のため急ぎ足になって申し訳ない」
脱ぎ去った白衣を丸めながら言った。タキシードに青い水玉の蝶ネクタイをしていた。
「これは老婆心から申し上げるんだが、病院より警察へ行ったほうがいいのでは？」

けれどこの医者のアドバイスは論外であると帰りの電車内で学は結論付けた。物品の紛失についてはともかくとして、いったい空き巣が柔軟剤やクマのぬいぐるみを置いていくだろうか？
もう一つの可能性として誰かが堂々と玄関から鍵を開けて入ったのかもしれない。合鍵を持っているのはマンションの管理会社と大井だけだ。だがいったい、家電量販店に勤め、学よりはるかに高収入の大井が田村学の留守をねらってわざわざチーズケーキや綿棒を盗みに入るだろうか？
翌週の水曜日、早番のため十六時半に仕事を終えると勤務先の物流センターをすぐに退社し、総合病院の神経内科に紹介状を持って訪れた。
簡単な問診のあとすぐにＣＴ検査室に入り、撮影を終えたあと待合ロビーでぼんやりテレビを観ていると一時間位たって名前を呼ばれた。ふたたび診察室に入り、医師がパソコン画面に取り込んだ画像を解説付きで見た。
「これがあなたの輪切りにした脳の写真ですね。端のほうから中心に向かってどんどん見ていきます。はい、大丈夫ですね。次もほら、きれいですよ、その次もそのまた次も、どんどんどんどん、ハイこれが一番奥です。
よく見て下さい、真ん中に二つある三日月形の湖みたいな黒い影、ほっそりしてますね、まるでロシアのバイカル湖みたいに。認知症の場合この影がもっとふっくらしているものです。ちょうど日本の琵琶湖みたいに。
さらに言えばそれ以外のほとんど灰色の部分、つまり脳そのものは至って健全、パイ生地みたいに細かい皺が畳まれています。脳の老化が進むと皺の一つ一つがグニャッと、まるでワッフルみたいに隙間が広がるものです。
画像を見る限り認知症に関してはここに写ってる頭骸骨みたいに真っ白、むしろあなたの脳は実年齢より若いとさえいえます」
冷徹そうな顔つきと親しみやすい喩えとのギャップに戸惑いながらも学はひと安心した。その直後、安心した自分の愚かさにあきれた。
「……では精神科に行ったほうがよろしいのですか？」
医師はいかにも賢明らしく両の掌を合せ軽く目を閉じると、
「もう少し様子を見ましょうか。あなたの場合むしろ生活習慣を改善すべきでは？　たとえばビールは一日に３５０ｌｍ缶一本、焼酎は５０ｌｍ、日本酒なら二合程度に……失礼ですが合法非合法にかかわらず過去に何か強い薬物を摂取されたことは？」
学はきっぱり否定した。医師はどうしても問題が解決しないなら、と言ってデスクマットの下から小さな紙切れを取り出して学に渡した。そこには同病院の心療内科の診察時間と担当医の名前が記されていた。

毎日仕事から帰るとサイフに挟んでおいたその紙片を取り出しては見つめた。初診の場合、通常は予約は取れず一般外来として受診するきまりだが、その気があるなら連絡をくれれば特別にこちらから心療内科のほうに予約を入れてあげますよ、そう帰り際に医師は提示してくれた。
だが仮に何かの精神疾患があると診断されたとして、その後の生活は一体どんなこと

に？　もしも病状が重篤であると判明し、社会からの隔離が必要と判断され、入院となった場合……。
　現在の精神病院の実態がどんなものであるか、学に予備知識は皆無だった。そのためほとんどB級サスペンス映画やサイコスリラーから蓄えたイメージが一丸となってとぐろを巻き彼をおびやかした。拘禁衣、猿ぐつわ、外部からがっちり施錠、筋骨たくましい看護人による虐待、男色の強要……。
―もしそんなことになればトミーにも会えなくなるな――
　元妻・麻紀の手に渡ってしまった愛猫トミーに想いを馳せた。
　子供のいない夫婦だったから子供がわりのトミーは夫婦関係の雲行きが怪しくなってからもかろうじて二人をつなぐ小さく貴重な鎖であった。
　その鎖は今にもひきちぎれそうなほど細く弱くほとんど意味をなくしながらも、なんとか持ちこたえていた。離婚時の学側からの唯一の懇願として、月に一度トミーに会い胸にかき抱くことを許されていた。
　会う場所はたいてい飼い猫同伴可の猫カフェだった。もちろんトミーが独りで妻の実家からカフェまで歩いてやってくるわけではない。先に入店した学が女性客ばかりのなか居心地悪く身を縮め、あくまで待ち合わせであることを周囲に知らせるべく何度も時計をチラチラ見ながらひっきりなしにコーヒーを舐めていると、ドアが開き妻だった女の両腕の中に丸まったトミーが目に映る。
　向かいの席に座った麻紀は腕を伸ばし、テーブル越しに学のほうへトミーを差し出す。着ているセーターに見覚えはない。結婚中はほとんどしていなかったマニキュア。それにしてもこんなにもすべすべした細い指だったろうか？
　会話はほぼ天気や簡潔な近況報告のみ、それが済むと麻紀はすぐに席を立ってケージや絨毯、畳の上に寝そべった猫たちのどれかに近づいていく。
　学は膝の上のトミーに話しかけながら、時々麻紀の姿に目を走らせる。店内は広く、階段、トンネル、本棚などが仕組まれているため物陰が多く、麻紀の姿を見失うことがよくあった。そんなときふと、麻紀が黙って帰ってしまったような、実際にはありえない不安が胸をよぎった。
　これと似たような錯覚を結婚当初にも経験したことを学は思い出した。家の近所で美味しいと評判のレストランを二人で探している時だった。一台しかない自転車のサドルに学が、後ろの荷台には麻紀が横座りの姿勢で二人乗りしていた。
　二人とも三十を過ぎていたし、そもそも麻紀は人前で学の腰に手を回す性格ではない。自転車がスピードに乗りはじめると、痩せた麻紀の体は重さをなくし、まるで後ろに誰も乗っていないような心許ない軽さを学の脚は感じた。そのとき背中で何か言った麻紀の声がきこえたとしても、風に乗って流れてきた他の誰かのよく似た声にしか聞こえなかった。
　猫カフェでの約束の一時間はまたたく間に過ぎた。麻紀が連れたトミーと別れたあと、学は必ずバーか居酒屋にひとりで寄った。そこでスマホを開き麻紀の許可のもと先程撮影したトミーの動画を眺めた。
　麻紀の膝の上でネズミ型玩具に噛み付くトミー、麻紀がしゃがんで見つめるなか柱上の爪研ぎによじ登るトミー、麻紀の頭上高く本棚のラックの一角にスッポリ収まるトミー……トミー単体での動画はなかった。
　麻紀の表情は後ろ姿か画面の外にあるため窺い知れない。酔いが進むにつれ学には、いくら目を凝らしてみてもそれがまだ幸福だった頃の記録にしかみえなかった。

　身の回りのすべての事物がこぞって指し示そうとしている心療内科への道程をなんとしてでも遮けなければならない。じりじりと踏みとどまるようにそう思い詰めた学は、
――まずは自分ができる範囲の努力から――
　ようやく断酒を決意した。
　じっとりした寝汗が一晩中布団カバーを湿らせ、半眠半覚のままグッタリ疲れ切った朝

を迎える日々がはじまった。
昼間の物流センター〝の上司からの叱責、同僚や後輩からの誹謗中傷、結婚の末期症状のなか妻とのいつ果てるともない諍いの記憶が生々しい声や表情の破片となって学に突き刺さった。
苦悩苦闘の成果はすぐに現れた。部屋の中の食物・日用品をめぐる神隠しはパタリと鳴りをひそめた。
それは二週間あまり続いた。大きな業績を成し遂げたような満ち足りた気分になり、何年ぶりとも思える安らかな深い眠りに陥った。正午近くになりようやく目が覚めた。冷蔵庫を開け牛乳パックを出してグラスに注ぎ、自分への褒美として買い置いた栗蒸し羊羹を食べようとした。入れたはずの扉の棚から消えていた。冷蔵庫中かき回したが、どこにもなかった。それと同時に、まるで学をあざ笑うかのように季節柄もう必要のない小バエ取りが部屋の要所要所に配置されていた。
知らず知らず足はコンビニへと向かった。これまでの田村学なら、どうせ禁酒など無駄な努力だったと、また心に空いた穴にアルコールを補填するところだが、今回は違った。心底恐ろしかったのだ。
ビール・サワーが林立するガラス扉を開きそうになる手をグッと押し止めた。その隣のソフトドリンクコーナーからエナジードリンクを抜き取った。店の外で飲みながら、左手はスマホを操作していた。それまでほとんどニュースしか見たことがなかったスマホを禁酒以来頻繁に開くようになっていた。
認知症や健忘症を検索するようになってから、ウエブサイトを開くとニュースの合間合間に心療内科や老人ホームを紹介する記事が挟まれるようになった。さらには夢遊病や不定愁訴、精神病一般を調べるようになると、精神科医やカウンセラー、サイコセラピストからウエブだけでなく日に何十件もメールが届くようになった。
栄養ドリンクを飲み終え空き缶を捨てると、スマホ画面を見つめたまま歩き出した。常日頃は路上での歩きスマホ、あるいは牛丼屋で箸を運びながらスマホをいじってる連中を苦々しく見やる学だったが、この日に限って我知らず画面に集中したまま気がついたら部屋にもどっていた。
レトルトを暖めるだけの簡単な食事を摂り、その後消灯するまでの約五時間、シャワーを浴びる以外すべての時間をウエブサイトの閲覧に費やした。日付が変わり、ようやく睡魔が襲いはじめると部屋の灯りを消し、そろそろ止めにしようと思いつつ、それでも闇のなか光る液晶を見つめていた。乱雑にスクロールしていた手がふとある文字列の上で止まった。
失くしたもの、見つけませんか？　夢の中で……
そのサイトを開き、指を当て画面を拡大する。
黒地に白い枠組みが、その上に紫色の文字が綴られていた。
至高の眠りをあなたに
睡眠セラピー　Chat Blank（シャ・ブラン＝白猫の館）
そのあと何行分かのスペースが空き、点々と猫の小さな足跡が刻まれていた。
経験ありませんか？　偶然とは思えない予知夢、正夢。
現実の世界で失くしたものに夢の中で再会してしまう、夢の中でしか再会できない、目が醒めた時の苦しさ、せつなさ。
反対に夢で見つけた大切なものが現実に手に入れられたとしたら？
夢でめぐり逢った素敵な人と、リアルに結ばれたら最高！
眠って見る夢（ドリーム）を醒めて見る夢（ドリーム）に変えたいあなた
杉田和女（すぎたかずめ）先生がお待ちしています
文脈と画面そのもののデザインから来る妖しさが不安を与える。
体験者から続々と寄せられた感謝や朗報のコメントが続いた。画面を下方にスクロールするとページの末尾に、代表者　杉田和女のプロフィールが掲載されていた。

日本メンタルケア協会認定　睡眠セラピスト
日本心理カウンセリング開発機構認定　心理カウンセラー一級

果たしてどの程度信頼の置ける資格なのか不明だったが、ひるがえって考えれば人の内面や生き方に関わる業種、必ずしも肩書きが能力を保証するものではないと自分に言い聞かせる。

画面を上方にもどし、『料金について』をタップする。

十五分千円〜二時間まで　それ以外の料金は一切いただきません

ほんの少しだけ、気持ちが傾いた。

『ご予約方法』という文字の上で親指の先はつかず離れず、指がおじぎするようにさっきから何度も第一関節を屈伸している。その四文字を囲む楕円形はうっすらパールホワイトに明滅しながら、浮き上がるようにも深く沈み込むようにもみえる。

それを押すだけでまた日に何十件もの得体の知れぬメールが舞い込むことになるかもしれない。おそらくはすべて迷惑メールであろうそれらを、それでも万に一つ天から届いた吉報が紛れているかも、とはかない願いを込め、どうせ一件一件チェックするにちがいなかった。あげくの果てすべてを削除し終えた徒労を思うと、学の指はひとりでにぐったり萎えていった。

――しまった！

画面に付きそうになった親指をとっさに持ち上げた。だが指腹の熱を感知した液晶はその瞬間斜めに傾き、もう一枚新たな画面が上に重なった。ふたたび緩やかなグラインドを始め、平面にもどった時には予約画面に切り替わっていた。

そこには来月分のカレンダーが広がっていた。日付の下にあるそれぞれの枠内にピンクの文字で『予約満了』と記されていた。第一週はすべてそうだった。

下方にスクロールすると第二週も第三週も、十月すべての枠がピンクの文字で埋め尽くされていた。

――この人気、いかがわしいどころか、まれにみる解決力、治癒能力を具えた先生にちがいない――

予約方法の詳細について書かれた記事を読むと、人気のあまり毎月十日午後０時からの電話による予約受付は五分足らずで満了、回線がパンクすることもあるという。

仮に十一月に予約するとして受付日は十月十日、その日は出勤日で休憩は午後０時から、現場に携帯は持ち込み禁止のため更衣室にもどってすぐに電話を掛けても最低五分のロスは見込まれ、つながる確率はほぼ皆無だった。

あきらめて他のカウンセラーを探す気にもなれず、思いあぐねたままいたずらにそのサロンのブログをのぞいていると、『イベントの告知』という文字が目に入った。

来たる９月８日（土）今年もＳＣ（ソウルカラー）コレクションに参加させていただきます。

なお当日は混雑が予想されるため、お一人様１５分限りとさせていただきます。あらかじめご了承ください。

その下にチラシの写真が貼り付けてあった。タップして拡大した。

ＳＣ（ソウルカラー）コレクション２０１８

（主催者のことば）

約５００㎡の会場に５５の個性的なブースが出店する初秋のスペシャルプレゼント！

癒し、ときめき、出会い、胸震える言葉が

あなたを優しく迎えてくれるはず

あなたのソウルカラーに合わせたすてきなグッズもご用意しております

ご家族そろってお越しくださいませ

主催　ＳＣコレ実行委員会

協賛　大日本魂色学会

主催者とカウンセリングサロン『シャ・ブラン』がどんな関係にあるのか定かでないが、にわかに宗教的色彩を強めたのは明らかだった。チラシの文言だけでなく、七色の旭日旗ともいうべき放射線状に配された虹色の帯模様、その中心に据えられた大きな瞳のイラストがさらに不安を煽る。高価な壺や印鑑を購入させられそうな気配が濃厚だ。

だが逆手に取ってみれば、それゆえにこそサロンでの通常営業ほどの人気にはならないのではないか？　いったんそういう考えに及ぶと、次第にこのチャンスがぎりぎりのタイミングで不意に手の平にこぼれ落ちた天からの慈雨の一滴としか受け止められず、どんなことがあっても手離してはならないと、スマホを持たないほうのこぶしをギュッと握った。

市内では中堅的な規模のビジネス街にある、某商業ビル二階のイベント会場に学が到着したのは土曜日の午前九時過ぎだった。

受付開始の九時半になると会場前のロビーに立って輪を作っていた中年女性たち、ソファに座って談笑していた高齢男女など計十数名は、とくにあわてる様子もなくなんとなく列を作り出した。学もその中に並んだ。

受付嬢に入場料千五百円を支払うとチケットとパンフレットを手渡され、

「プレゼント、どれになさいますか？」

カウンターの上に商品が三つ並んでいた。開運札、開運シール、開運ボールペン。

「開運札をお願いします」

七福神がカラフルに描かれていた。

学はパンフレットを裏返すと会場の見取り図に素早く目を走らせ、睡眠セラピー『シャ・ブラン』の出店場所を探した。会場奥の窓際沿いに並んだブースのほぼ中央にそれは見つかった。

すでに会場入りしていた十数名全員がそこに殺到するのかと思い小走りの体勢をとったが、誰も急ぐ様子はなかった。

学はゆっくりブースに近づいていった。イベント開始は一〇時、まだテーブルの配置を変えたり、繋いだ延長コードを壁や床にテープ止めするなど設営中の店も多かった。

『シャ・ブラン』のコーナーにもまだ出店者は不在で、テーブルに紙箱が置かれ、その横に『整理券をお取り下さい』とポップが立っていた。

箱をのぞくと、『4』と書かれた紙が一番上にのっていた。

――すると三人待ちだから、十時四五分から見てもらえるな――

それまで他の出店をのぞいてみることにした。

やはり何といっても占いやセラピー関連が多いのが注目された。アロマセラピー、カラーセラピー、タロットカードに筆跡鑑定。変わったところではインド占星術、宇宙占い、マヤ暦によるインカ占い、開運耳つぼマッサージ……と枚挙にいとまがなかった。

だが会場の中央で幟を立て最も目を惹くのは主催者である大日本魂色学会によるソウルカラー鑑定ならびにそれぞれの魂の色に合わせたグッズの販売だった。

それらグッズの値段は学が危惧していた法外なものはなく、街中のアクセサリーや健康グッズに比べてもいたってリーズナブルな設定だった。

それは会場のあちこちに点在する飲食物の出店についてもいえた。焼きそば、パン、クッキー、おにぎり、日本茶、ハーブティー、椎茸などが販売されていたが、それらは祭りの夜店や帰宅ラッシュ時の駅前に出没する露店よりはるかに安く、むしろ高校の文化祭に出店するバザーに近いものだった。

朝食を摂っていない学はさっきから空腹に耐えかねていた。会場入りした直後から入口付近で鼻腔と胃袋を直撃したスパイシーで濃厚な香りに自然と足が吸い寄せられていった。

「いらっしゃいませ」

メニューはそれしかない『ソウルカレー』四百円を一皿注文した。

同じチェック柄のエプロンとバンダナを着けた、化粧気のない顔に笑みを絶やさない中年女性が発砲スチロールのトレイにご飯を山型に盛り、鍋のフタを開けトレイの平野部にカレーを注いだ。いったんトレイを鍋と炊飯器の間に置くと、おもむろに目を閉じ急に真剣な表情になった。トレイの上空に両手をかざすと、ピンと伸ばした指先を指圧でもするかのように小刻みに震わせ始めた。

「お待たせしました。ソウルカレー出来上がりです」

数秒後、ふたたび笑顔を取り戻し店員は言った。

訝しげな思いのまま学は代金を支払い、カレーを受け取った。そばにいくつか置かれた丸テーブルを囲む丸イスの一つに腰掛けた。食べながらなお腑に落ちない様子でカレー店のほうを眺めていた。よく見ると、さっきは気づかなかったが食器などを置いた机の端から垂れたラミネート紙に『ソウルパワー注入します』と書かれていた。

食べ終えるとまだ巡っていないエリアを見て歩いた。途中一杯百五十円の紙カップに入ったコーヒーを買ったが、そのポップには『パワー注入済み』と記されていた。

そのうち予約の時刻が迫ってきたので、睡眠セラピー『シャ・ブラン』のほうへ足を向けた。

十時四十五分を過ぎてもブースである白い布を張った長机の前には先客が座っていたので、しばらく待った。まもなくスマホのタイマー機能の電子音が鳴り、客は深々とおじぎしたあとその場を去った。学は整理券を机の上にあった回収箱に入れ、入れ替わりに腰を下ろした。

「杉田和女です。よろしく」

黒いサングラスを掛けた女が机ごしに唇だけで笑った。レンズは真っ黒で目は全く見えない。同じように真っ黒なタートルネックのセーターが無理に縮めたかのように狭く厚みのない肩から長い首にかけての線を際立たせている。全体的に黒一色の印象がブルーにシルバーを混ぜたような頭髪の、金属的な青さを強調していた。

「サングラスで失礼しますね。このほうがお話をよりよく傾聴できるものですから」

落ち着いた話し方とややしわがれた声が見た目以上の年齢であることをうかがわせた。

「それで今日はどのようなご相談？」

左手でストップウオッチを押しながら杉田和女は言った。

秒単位で過ぎていく時間のデジタル表示を気にしながらなるべく簡潔にと心がけ、学はこれまでの経緯を語った。

三分以内に語り終えた。膝に手をのせ、時折うなずきながら聞いていた杉田和女はしばらく身動きせず無言のままだった。

ややあって小さく咳払いすると、

「ご心配には及びません。それは全くよくある事です」

醒めた口調で言った。

「すると色々な物品が失くなったり現れたりするのはいったい……」

思わず前のめりにテーブルの端を握り、問い詰める学を軽く手で制し杉田和女は、

「まずは最初の出来事、つまり友達と過ごした夜のことを詳しく話して下さい」

学はあの夜から朝にかけてのことを食べ物や飲み物、二人の会話や服装、座っていた位置、エアコンの設定温度まで記憶する限り時系列を追って話した。

すると杉田和女はメモを取りながらうなずき、あの日観た映画の内容についてもっと詳しく述べるよう促した。

話しているうちにストップウオッチのタイマーが鳴った。

「残念ながら今日はここまで。しかしあなたのケースには個人的にとても興味を惹かれるものがあります。もしよければ」

といって和女は机の上に重ねた名刺を一枚学のほうへ滑らせた。さらに足元の紙袋から透明なビニールに包まれた黒い物を取り出した。

「就寝前、お手持ちの携帯にこれを接続して耳にあてがって下さい。そして名刺に書かれ

た番号に掛ける。ここからが大事なところです。
三回鳴らしたらいったん切るのです。いいですか、三回ですよ。
そののちもう一度発信し、灯りを消して布団に入り目を閉じるのです」
その黒い物を受け取った。一見したところ、どこにでもあるごく普通のヘッドフォンだった。
「ところでこの分の代金は……」
和女は力強くうなずき、
「それについては後ほどご相談に応じます。といってももちろん成功報酬です。少しでも問題が解決されないままなら、対価は一切頂きません」
すぐ後ろまで来ていた客のほうに和女は顔を上げた。押されるように学は席を立った。深々とおじぎした学のほうを向くことなく、もう杉田和女は次の客に応対していた。
「それじゃあ、早速今夜始めてみて下さいね」
それが学に向けられた言葉だと気づいたのは数歩遠ざかってからだった。

その日の夜、シャワーを浴び歯を磨くと学は床の上で三十分かけて入念なストレッチを行った。この後眠ろうとしているはずなのに、なぜか肉体を駆使する必要に迫られる気がしたからだ。それに健康的で清浄な心身で眠りに臨みたいという気もあった。
そのため夕食は野菜のみのレシピで済ませた。食後はコーヒーでなく白湯を飲んだ。
ストレッチングを終えると全身を軽く快い疲れが巡っていた。仕事のあった日の夜、ちょうど今と同じ午後十一時過ぎに感じる、鈍く体の奥深く錘が沈み込んでいくような、あの疲労感とは別種のものだった。滑らかに眠りへと滑り込んでいけそうだった。
布団を敷くと、カバンから杉田先生に借り受けたヘッドフォンを取り出し、頭に装着する。スマホに接続し登録しておいた杉田先生の電話番号を開くと、消灯し布団に入った。
うつ伏せに枕の上に頬杖をつき、発信ボタンを押した。発信音が三回鳴ると切り、もう一度掛け直した。いたずら電話をしているような高揚感から、まるで自分が耳だけの巨大なカタツムリになってしまったように、鳴り響く一音ごとに全身がどくどく脈打っている。
発信音が途切れた。何の物音もしない。そう聞き違えるほど微かな音が電話口の向こうでしていた。それは緩慢な音楽だった。風のない午後、空に浮かぶ雲が目に見えない動きで流れるような、穏やかな日差しのなか日時計の針がうつろうような、耳を澄まさないと聞き取れない音の淡いグラデーション。学は布団の中で体を反転させ、仰向けに目を閉じた。
そのままじっと音楽に身を委ねていると、ほんのわずかだがさっきより音量が増している気がする。時折ハープや鈴の音のようなものが混じり、微かなアクセントを添えた。
その向こうで誰かが声なき声を発している気がする。想像の目は寒い冬の朝、一面霜に蔽われた厚いガラス窓の前に学自身が立っている。戸外でははっきり姿のみえない誰かがガラスに顔を寄せ、何かをこちらに伝えようとしている。吐く息がガラスに張りつめた霜をそこだけ一層白くする。
じっと見つめているとその紋様が徐々に言葉に変わっていく。
「……聞こえますか？」
いきなりはっきりと女の声が耳元でした。
「ハイ」
反射的に学は口走った。
「イメージしてみて下さい、あなたはもう入口まで来ているのです。さあもっと前へ、一歩一歩ゆっくりと……」
さっきまであったガラス窓は消え、色さえ定かでないただの闇が広がっている。そうっと目の周りに力を加え、闇を前方に推し進めようと意識する。
「そこで止まって！　足もとをよく見て、階段があるはず。右足を出して爪先で段差を感じるの、ゆっくり足を下ろしたら同じように左足も、そんな風に一段ずつ下りていくのよ」

今度は足の指に意識を集中させ、実際に動かすのでなく階段を下りていくことをイメージする。
「さあ地下一階に着いたわ。ぼんやり何か見えるはずよ。丸く黄色く光るもの……」
だんだん見えてくる気がした。
「豆電球」
と答えようとした学の「マ」の音に、
「そう、真鍮のドアノブね」
声が被さった。
それで杉田和女が今実際に話しているのではなく、録音した声だとわかった。
「さあ恐れずに手を伸ばして握ってみて。右に回して押すのよ」
そう言われても裸電球にしか見えないのだが、とりあえずそれを握って回した。押してみたが、そこにある固く冷たいドアらしきものはびくともしなかった。全身をドアの板面に押し当て、力ずくでこじ開けようとするのだがどうにもならない。
何度か試しているうちすっかり疲れ切ってしまい――学の意識のなかでは――立ったままドアに寄りかかって、本当に眠ってしまったようだ。
どれくらい時間が経ったのか、気がついた時にはまだ立ったまま、額をドアに押し付け右手はあいかわらずドアノブを握りしめていた。
――だが今こうして立ってるということは、まだ本当には目覚めていないということだな――
そのときなにげなく右手をひねると体の重みでスーッとドアが開いた。思いがけないことになすすべもなく学は、ドアの回転とともに立てかけたモップみたいにバタリと向こう側の床に倒れた。
「これからあなたの身に起こるのは、いままで経験してきた眠りとはかけ離れた、信じがたい出来事の連続です。
でもいいですか、くれぐれも夢だということを忘れてはなりません。常に頭の片隅に留めておくのですよ。
それではよい夢を、ボン・ボヤージュ！」
学が尻餅をついているのは、大理石を模して白と灰色の混じった、ところどころひび割れのあるリノリウムの床だった。それが真っ直ぐにずっと先まで続いている。
あたりを見回すと、廊下の両側にはこれもかつて喫茶店や理髪店でよく目にした、分厚く複雑に光を反射させるレトロな装飾のガラス扉が紫や緑など色彩豊かに見渡すかぎり並んでいた。
――ははあ、夢だから幼い頃に見たとくに印象的だった視覚的な記憶を基に場面構成されているんだな――
と杉田和女の指示どおり夢であることを再確認すべくそう独言した。
――それにしても夢とはこんなにも隅々までくっきり見晴らせるものなのか――
立ち上がってガラス戸を一つ一つ興味深く見つめながら通り過ぎていく。いくつかのガラスの奥では人影らしきものが微かに揺れ動いていた。
――当然の成り行き上というか、夢の文法に従うなら、これらのうちいずれかの扉を開けて中に入るより他に手はないな――
しばらく迷ったのち、とりわけノスタルジックな気分をかき立てる玉虫色の扉の前で止まった。軽くノックし、把手を手前にそっと引いた。
そこは横幅にしてワンルームマンション程度の、きわめて狭苦しい空間だった。けれど同時にはるかな広大さを感じさせる奥行きがあった。
理由はすぐにわかった。本来なら今見えているよりはるかに広い空間を、狭く切り取って映しているせいだった。
それは見慣れた職場の風景、物流センターに隣接して設置されたプレハブ事務所の一角だった。

デスクの引き出しを開けて中身をかき回しているのは上司の前田幸男だった。年齢は学より一つ下だが、高卒採用のため勤続年数の長い前田はセンター従業員のなかでもとりわけ学に心理的圧迫を加える存在だった。
現場の何人かで談笑している時などは学に対しても冗談を交えてフレンドリーに接する前田だが、二人きりになったとたん態度は一変する。物流センターでは早番の場合通常八時出勤だが、前田は誰よりも早く毎朝七時には出社していた。
学を含め後から次々と事務所に現れる社員たちに明朗快活にあいさつする前田だが、その実他の社員たちが皆更衣室に出払い、他に誰もいない時ドアを開けた学の、
「おはようございます」
に対し前田は黙ったまま顔を上げることなく、机に向かって回覧ノートに見入っている。最初のうち聞こえなかったと思っていたのが月日を重ねるにつれ今や日常茶飯事、十度に一度くらい「おはよう」の「……う」を蚊の鳴くように呟くのが関の山だった。
大手コンビニに卸す雑貨類全般を種分け・梱包するのが学たちの主な業務だった。同じラインに入った時など前田は、目の前に流れてくる筆記用具や医薬部外品を学が取ろうとするや斜め前から身を乗り出して掴み、溜め息や舌打ち、歪んだほくそ笑みを繰り返すのだった。
その前田が今事務室が映る空間内で、血の気の失せた形相で机の中を物色している。
「捜し物ですか？」
足元に水溜りみたいに丸く切り取られた地面に立ったまま学は声を掛けた。
「ない、ＵＳＢがないんだよ！」
そういえば明日は終礼のあと職員会議で、前田がプレゼンの当番であるのを思い出した。
「そうか、やっぱりカバンの中か……」
前田は床に膝をつきがっくりうなだれた。
「どうしたの？　カバン……」
学は軽い口調できいてみた。
「あそこに忘れてきたのかよ！」
学の声が聞こえたのだろうか？　試しにもう一度、
「そこに取りにいけばいいじゃない」
学は言ってみた。
「もう閉まっちゃってるよ！」
そういえば前田は非番の日にはきまって図書館で一日を過ごすことを好む、と公言していた。歴史小説の熱心な愛読者で、司馬遼太郎全集を読破すること二回、現役作家による新刊書も好んだがなるべく購入することは控え、図書館でリクエストして取り寄せていた。
こうしたライフスタイルから容易に想像されるとおり女性とは絶えて縁がなく、むしろ自分から壁を設けている節も見受けられた。職場でも老若問わず正社員やアルバイトの女性とは必要最小限の業務連絡のみ、構えた態度で接し絶えず硬い表情を崩さなかった。
明日は日曜出勤であることを思い出した学は、
「図書館なら八時半に開きますよ。昼休憩を利用して取りに行くか、あるいは主任が出社したら率直に事情を話してすぐに取りに行ったら？」
そこまで言ってふと学は事務所の壁に掛かった時計を見た。十二時十八分。昼だろうか、夜だろうか？　見たところ事務所内には前田のほか人の気配はない。それに話の筋道から推し量って夜の十二時にちがいない。
とそこまで考えて、そう冷静に分析している自分にあきれた。これは夢じゃないか。
だがそもそも、どうしてこんな夢を見るのだろう？　もしかするとこれは前田による理不尽な仕打ちに対する意趣返しとして、日頃から鬱積した不満から生まれた学自身の無意識にある願望だろうか？
そんなことを思っていると、いつのまにか事務所内から前田の姿は消えていた。
だれもいない事務所はなんとなく全体の遠近感が狂っていた。だんだん粗い画素が目立

ちだした。机やロッカー、備品など細部の造形が怪しくなりはじめ、そのうちすっかり平面的な一枚の、稚拙な子供の図画みたいになった。端のほうからめくれ、ハラハラはためきながらどこかへ飛んでいった。あとには薄暗い闇が残った。

目が慣れてくると、中学や高校の教室で目にした木製の机が二つ横に並んで置かれてるのが見えた。その後ろに並んだイスには制服姿の男女が膝に手をのせ背筋をピンと伸ばして座っている。夕暮れか朝焼けみたいなオレンジ色の光が机の上のビーカーとその中の氷、フラスコとその中で泡立つ液体にキラキラ反射している。机の端に置かれたジャポニカ学習帳には表紙の中程に『メニュー』、その下に『平成女学園』の文字がなぜかそこだけくっきり見える。

セーラー服の少女がおもむろにフラスコを手に取り、氷の入ったビーカーに炭酸を注いだ。詰襟の男がビーカーを持ち上げ、緊張した面持ちで何か言ったあと、炭酸を飲んだ。庇の付いた制帽を目深に被っていたから最初のうちわからなかったが、男は前田だった。

金髪の女子高生と見えた女もよく見るとほうれい線が目立った。何度かグラスを口につけるにつれ崩れていく前田の相好から、液体はアルコール飲料のようだ。

その教室では時の経つのが速かった。壁の丸時計はまるで誰かが指で回してるみたいに分針がみるみる進み、すぐに八時から九時になった。制服の二人もそれに合わせコマ落としの速度で前田がセーラー服のスカートに手を掛け、女が跳ね除ける、の動きを繰り返していた。

突然前田の上体がグニャッと横に倒れ、女に凭れかかった。女はサッと立ち上がり、空いたイスの上に前田は側頭部から崩れ落ちた。

教室の戸がガラガラ音を立てて開いた。前田と同じ制服制帽の背の高いヒョロッとした男が近づくと、前田のポケットにぐっと右手を差し込んだ。出した掌にはサイフが握られていた。札を何枚か抜くとまたポケットにもどした。

それから前田の詰襟の第二ボタン付近をつかむと、ぞんざいに揺さぶった。やがてイヤイヤをする赤子みたいに鈍重に首を振った前田が男にすがる恰好で立ち上がると、二人は親友のように腕を絡め教室を出て行った。

――いったいこれは俺の見ている夢だろうか？　ここから果たしてどんなメッセージを受け取り、問題の解決につなげていけばいいと言うの？――

教室の時計を見た。時刻は十時五十五分。短針も長針も今は正常な動きを刻んでいる。もしそれが今日の午後を指すと考えれば、さっきの事務所より一時間あまり遡った時刻ということになる。

その時前田の座っていた机の脚の間に黒い物が残されているのを発見した。前田のビジネスバッグだった。

学の足はひとりでにクツを脱ぎ、目に見えないカーテンをかき分けるように両手を目の前に突き出すと、教室と映る空間に踏み入った。

とたんに男女の入り乱れた嬌声、風俗店特有の喧騒が耳に飛び込んだ。壁と天井の角に設置された校内放送用のスピーカーから漏れていた。教室内を見回すと、さっきまで死角になっていた部分はすべて錆びた水色のトタンだった。天井は剥き出しのコンクリートで、黒ずんだ配管がうねっていた。

廊下を軋ませて足音が近づいてきた。学はカバンを拾い上げると、もと来た方へ振り返った。さっきまでそこにいた土間、その向こうのガラス扉は色が薄れて半分消えかけ、白濁していた。その白い靄はみるみる立ち込め、学の頭の中にも染み込んでいくようだった。

誰かに後ろから思いきり背中を押されたかのように突然目が覚めた。

「アッ！」

短い絶叫が口から洩れた。手足にはさっきまで必死にもがいていたような震えが残っていた。布団の上で行儀よく仰向けに横たわっている自分を発見したことに驚いた。

耳には通話が終了したことを告げる単調な音が流れていた。学は握りしめたまま汗でヌ

ルヌルしたスマホをシーツで拭い、通話終了ボタンを押した。
ヘッドフォンを耳から外そうと心持ち頭を浮かせた時、枕が異様に固く後頭部に食い込むゴツゴツした感触を持っていることに初めて気づいた。首を回し、枕を真近に見つめた。一瞬焼け焦げているのかと思った。愛用の黄緑の低反発枕ではなかったからだ。
見覚えのあるカバンだった。黒い布を張った分厚い矩形の、見るからに安物のビジネスバッグだった。はやる指先でチャックをぐるりと回し開けた。クリアファイルに挟んだ書類の束、筆記具、ウエットティッシュ、ガム、のど飴、ミント、栄養ドリンク、スポーツ新聞、求人情報のフリーペーパー、古本屋の百円の値札が付いた『新撰組血風録』……。
もはや疑う余地はなかった。いくつかあるクリアファイルを一枚一枚右から左に繰っていった。今日の職員会議用のレジュメが見つかり、紙の間にできた不自然な溝に手を差し込むと思ったとおりにＵＳＢが現れた。会社支給で社員なら誰もが同じ物を持つその白い表面にはテプラで『前田』と貼ってあった。
――これは一体……
さっきの夢――夢の常がそうであるように、目が覚めて頭をほんのわずか揺らした瞬間、記憶の側溝に吸い込まれてしまい、暗闇で微かに光るそれにフタの網目から指を差し込みなんとか摘まみ上げようともがくうち、みるみる光が失せていく……のかと思いきや今も隅々まで掌中に把握しているさっきの夢。
――カバンはあの時あそこから……？
夢の中から持ち出したとでも言うのだろうか？
だが仮にそうだとすれば、この二ヶ月にわたる謎の物々交換の説明がつくのだ。
――そんな訳ないじゃないか？　あくまで理性に則って冷静に考えるんだ――
全く理不尽な神秘主義に百歩譲って、もしもあの夢が事実に基づいたものだとする。ならば当事者しか知りえないのだから、何らかの方法で前田の夢かあるいは前田の意識にアクセスしたことになる。
最初の事務所でのシーン、時間的に見てあれは現在進行形の事実だったかもしれない。そして次の風俗店でのシーン、あれは前田の夢もしくは記憶、つまり少し前の事実ということになる。
――すると何らかの経路をたどってあの店、『平成女学園』を俺は探し当て、実際に俺自身の足で入店し、カバンを持ち帰ったんだ――
そう思い至ったそばから首を振って打ち消し、また一から考えを練り直した。
思い出した。毎日退社時になると事務所でタイムカードを押した前田はロッカーからカバンを出して共用デスクの上に置き、そのまま更衣室へ着替えに行くことを。その時間従業員はほとんど更衣室にいるか現場に残ってるのだから、机の上のカバンを持ち去ることは容易なのだ。もし学が杉田和女のブースを離れたあと休日にもかかわらず物流センターへ赴き、前田への意趣返しとしてカバンを持ち出し、今にいたるまで失念しているのだとしたら……。
――俺は完全に狂ってると認めざるをえない――
スマホの時計を見た。時刻は午前二時四十分。電話アイコンを押した。通話履歴を開き、杉田和女にリダイヤルしたい衝動に駆られた。だが時間帯的に非常識と思い直し、必死に耐えた。布団の上で膝を抱えたまま朝を迎えた。
ようやく時計が七時きっかりを表示すると、もうとっくに出社準備を終えていた学はリダイヤルボタンを押した。電話はつながらず、部屋を出た学は駅へ向かいながら五分おきに掛けた。
電車の中でスマホの待ち受けをじっと見つめ和女からの着信を期待したが、来ないまま降車する駅に着いた。
会社までの徒歩二十分の道のりを歩きながら、ふたたび五分おきにリダイヤルした。会社の通用門が見えてきた時、最後にもう一度だけと向かいの電柱の陰で掛けた。発信音が十回以上鳴り、そろそろ切ろうとした時、音が止まった。

「……はい」
名乗ることも忘れ、昨夜の一部始終を学はまくし立てた。
言い終わったあと、しばらく何の返答もなかった。だが沈黙の向こうで杉田和女がサングラスに半分隠れた顔で口だけ曲げて微笑んでいるのを学はなぜだか感じた。
「まあ落ち着いて。いったん深呼吸してみなさい」
言われたとおり深呼吸した。けれどまるで落ち着くことはなかった。
「やっぱりあなたは私が思ったとおりの方ね。何事もネガティブに物事を捉え、すべては自分のせい、もしくは自分のおかげ、何なら天変地異ですら自らのなせる業と錯覚してしまう人。
どうしてもっと自分自身や自分の身に起こった事を前向きに捉えてあげないの？」
――どこをどう前向きに捉えろというんだ！　俺の望みは今あるわずかなものを失いたくないだけなんだ。
何物も奪われたくないし、与えられたくもない。放っておいてくれ、俺も放っておくから。その証拠にこの手をすり抜けていったもの、あれほど大切にしていたものさえ追いかけて取り戻そうとしてないじゃないか。
なのにどうしてどいつもこいつも、わざわざこれ以上奪おうとしたり与えようとしたりするんだ！――
喉元までこみ上げたそんな悪態のかわりに、
「仰るとおり私は骨の髄までネガティブな人間、いうなればネガティブさにおいてポジティブですらあるほどなんです。
けれど今ここでそれについて根本的に見つめ直す時間は私にはありません。
先生、私が伺いたいのはさしあたっての問題について具体的にどう対処すればよいかなのです」
きわめて冷静沈着な口調に努めた。
憤懣の気配をみせたのは杉田和女のほうだった。
「何を聞いていたの？　さっきから私が話してるのはあなたが相談なさった直近の問題についてなのですよ！
言われるとおりあなたにも、そして私にも時間がありません。ですから単刀直入に、とはいえ心の問題ですからある隠喩を用いて簡潔にご説明します。
おめでとう、あなたは翼と嘴を得たのです」
学は文字通り絶句した。かろうじて、
「……と申しますと……」
「人が見た夢の話を聞くのってどう？　そうよね、これ以上ないほど退屈でしょう。
でもそれが実際にその人といっしょに、まるで並んで映画でも観るみたいに観れるとしたら？　そんなことあるはずがないと思うでしょう。
たしかにそれはとても難しいことだけれど、ごく稀にあるのよ。どれくらい稀かというと、聖書に『ラクダが針の穴を通る方がもっとやさしい』って言葉があるのをご存知？　もの凄く難しいことの喩え。イメージできる？　ラクダを針の穴に通すより難しいってことを。
でも現実に、昨晩あなたがそれをしたの。人の夢に入る穴と、そこを抜け物理的に距離を隔てた現実に出ていく穴。その穴を探し当てる鋭利な嘴、そして穴から穴へ飛び立つ翼。
簡単に手に入れられるものじゃないわ。よく聞いて、これは祝福すべきことなのよ。だからおめでとう」
配送センターの社屋から就業十分前を告げるブザーが鳴っていた。
「自分でよく考えてごらんなさい。あなたはまだ本当にはわかっていないわ、自分が何をすべきか、何をしたいのか。
もう一度言いますよ、これは非常に限られた人にのみ訪れる、しかもほんのわずかな期間内にしか許されない能力なのです。明日にはもう消えてしまうことだって……だから今

すぐ、何なら会社を休んででも自分がよりよく生きるためにするべきことをするのです」
物流センターの外階段を上り、二階の事務室のドアを開けた学はいつもなら前田がそこに座っているパソコンの前の席が空っぽなのを発見した。忙しげに行き来している従業員たちの中に同じ作業班の顔を捜した。給湯室の鏡の前で毛髪を整えている現場主任の辻本の姿を見つけた。
「おはようございます主任、前田さんはもう現場ですか？」
辻本はロウソクの炎型に仕上げた髪のひと房を両手で護りながら、
「ああ出社するなりえらく慌てて出ていったよ。有給扱いで帰らせてくださいって。何でも昨日図書館に忘れ物したって言ってたな」
――これでもう間違いない。俺がこの事務所から前田のカバンをピッキングしたという線は消えた。やっぱり夢は正夢、いや俺は前田の夢にアクセスしていたんだ。そして前田の夢の中から脚を延ばして『平成女学園』へ入店し、あいつのカバンを手に入れたことに間違いはない――
学はむしろホッとしている自分に驚いた。
辻本が事務所を出てゆき、知っている顔がいなくなったことを確かめると、学は大きな紙袋から前田のカバンを取り出し、広いデスクの上へ無造作に投げ出した。
その日の勤務を終えると、自宅の最寄り駅前にあるチェーン系カフェに立ち寄った学はミルクコーヒーを飲みながら次にどうするべきか考えた。
『つまりは次に誰の夢に侵入すればよいかだ』
考えるまでもなかった。大井芳樹を置いてほかになかった。
不思議なことにあの夜以来、大井が学の部屋に泊まりに来ることはなかった。学もまた一連の事件に心を奪われ自分から誘うことはしなかった。ことに事件の発端が大井の泊まったあの夜である以上、何か触れてはならない不吉な人物であるかのように旧知の友を斥ける抗い難い磁力が、それとは逆に問い質してみたいという強い引力もまた同時に作用し、斥力のほうがわずかに勝っていた。
それでも数回、メールで近況をたずねたことがある。帰ってきた返事は最近パソコン売り場に配置転換となり、商品知識のインプットに休日返上で励んでいるとのことだった。
夜の十一時になると昨日と同じようにスマホで杉田和女の携帯電話に掛け、三回鳴らして切った。ヘッドフォンを頭に着け、スマホにつなぐと消灯し、布団に入ると再ダイヤルした。
昨日と同じようにうっすらとアンビエント風の音楽が流れ、しばらくたつとこれも昨夜と同じ、
「……聞こえますか？」
やはり録音にちがいない。
その後も同じ手順を踏んでどうやら眠りに沈んでいくと、またあのドアノブをひねって今度は転ぶことなく地下一階の廊下に出た。
――とはいえ、一体どの部屋に入ればいいの？――
数ある色ガラスの嵌った扉の中からどの色を選ぶか迷った。とりあえず大井のイメージカラーともいうべき、セーターやカーディガン、靴下やボクサーパンツにまで愛用している赤のガラス扉の前に立った。ノックしてドアノブを引いた。
またしてもワンルームマンションそっくりの狭い靴脱ぎ場を隔てた向こうに輝度の低いスクリーンのようなもの、やや鮮明な蜃気楼のようなものが立ち込めていた。
コンクリート打ちっ放しの床に焦げ茶色の柵、どこかのベランダかバルコニーのような場所が映り込んでいた。
柵の向こうに見える風景、低層アパートや住宅家屋の屋根、タワーマンションの上の部分、緑色に煙る山並みなどからビルの高層階にあるらしい。
――訪れたことはないが、たしか大井は十一階建マンションの八階に住んでると言ってたな。だとすれば大井の住む部屋のベランダである可能性は大――

床の上には革のサンダル、そこかしこに観葉植物の鉢や葉物野菜が細長い緑を繁らせたプランター、柵には蔦が絡まっていた。趣味で家庭菜園の初心者だと話していたことを想い出し、ますます確信に近づいた。

よく見ると、それぞれの植物はどれもほんの数秒前より背丈や葉の密度を高め、刻々と成長を遂げていた。にわかに日射しも燦々と強まり、ますます緑を明るくしている。先の景色を覆い隠すジャングルの密林の一角、植物王国の観を呈した。

――これは二重の意味で大井の夢、つまり大井の抱く願望でもあるのだろうか。

昨日は前田の夢に一歩足を踏み入れたとたん、現実の『平成女学園』に到達したはずだ。だとしたらこのベランダに出たとたん、俺は一体いつどこの時空に晒されることになるのだろう？――

ヘッドフォンから聞こえてきた杉田和女の言葉を思い出した。

「勇気をもって……」

――あまりに危険すぎる。『勇気ある撤退』という言葉もあり……――

心なしか肩を落としている自分を、どこかにある監視カメラのような視線で斜め上からもう一人の自分が見ているのを意識しながら、踵を返した。

不意に海底から浮かび上がる深海魚みたいに今夜もまた唐突な目覚めだった。スマホを見ると午前一時過ぎ。もう一度夢への侵入を試みた学だったが、ヘッドフォンを耳に当て杉田和女の声を聞いても、とうとうその夜は寝つけなかった。

次の日にはよりすんなり眠りへ導かれるようにと、午前の勤務からいつもより精力的に動き回った。ライン作業ではコンベア上を流れてくる生活用品を一つでも多く掴み、所定のカゴに投入した。午後からの梱包作業でも発注書をもとにダンボール箱に商品をなるべく隙間なく詰め、緩衝材を入れテープ止めした。出来上がった箱を台車に積み、発送係まで運んでいくのは本来パートの仕事だが、少しでも手が空くと学自らが行い、決して若くないパート主婦の労をねぎらった。

その甲斐あって帰宅してすぐシャワーを浴び、夕食を終えたとたん睡魔がやってきた。儀式のように厳粛な面持ちで決められた手順をこなし、床に入った。

スムーズな入眠のあと、地下一階のフロアに出た。赤い擦りガラスの扉をノックし、中に入った。

目の前には昨日と同じベランダ、そこに並ぶ植物群は打って変わってすっきりと配置されていた。昨日目にした象の形をしたジョウロのかわりに小型スプリンクラーが設置されている。

――これも大井の願望あるいは物欲が形象化した夢だろうか？　たとえそうであったとしても現実の似姿と信じ、多少のリスクは覚悟しなければ。

さあ、こうしてはいられないぞ。また風景が超現実的な変貌を見せ始める前に、さっさと無断侵入して真相究明のきっかけを掴まなければ――

ベランダとその前方にわずかに覗く部屋のフローリングとを仕切る全面ガラス張りの引き違い窓を蹴破るかのように真ん中へ足を踏み入れた。ガラスは学の爪先のまわりで水銀のように光りながらグニャグニャに溶け、足首からふくらはぎ、太腿まですっぽり通した。

全身が窓の向こう側へ着地してみると、驚いたことにさっきまで陽光降り注いでいたベランダが夜の闇に包まれていた。今さっきそこを通り抜けたガラス窓はいつのまにか向こう側からベージュ色のカーテンで蔽われている。

ベランダ内の様子を検分しようと移動を試みるが、わずかな月明かりや周囲のマンションの外灯のみで黒々と地面に蟠る鉢やプランターに危うくつまずきそうになる。下の方から車の走行音が想い出したように急に届いてきた。それにさっきよりひんやり肌寒い。

――するとここでもまたリアルタイムに合わせて事は進行しているのか――

真っ暗なカーテンの隙間から覗くと、ガラスの向こうはさっき学が立っていた土間では

なく、灯りを消した部屋に変化していた。誰も座っていないソファ、背の低い机、テレビ、加湿器らしき輪郭が影を落としている。
――もしリアルタイムだとしたら十二時前、大井もぐっすり眠っているのかな――
それでもこのままベランダでじっと立ちつくしたままでは埒が空かない。リビングに侵入する覚悟を決めた学は窓のサッシに手を掛けた。だがこれまでの順調な流れからすれば意外なことに、引き違い窓はびくともしなかった。
――ここが現実世界だとしたら、防犯上当然のことだ――
試しにさっきベランダに入った時の要領で、ガラスの表面へ向け右足の爪先を鋭角的に、だがさっきより力加減を落として窓を突き刺すように近づけてみた。分厚い強化ガラスは靴下に包まれた足の親指をにべもなく撥ね返し、あまりの痛みに学はうずくまった。
――このままここで朝を迎えてはいけない。起床してカーテンを開けた大井の反応は想像に難くない。友人といえども不法闖入者として警察に突き出されても文句はいえまい。ここはひとまず潔く撤退しよう。
だがもはやつけ入る隙もなく本来の質感を取り戻した強化ガラス、ほんの数分前みたいにあっさり受け容れてくれるタイミングもしくはポイントは残されているのか？――
学はガラスを隈なく見渡し、さっきの侵入地点を想い出そうとした。おおよそこの辺りと見定めた箇所に、そうっと足先を伸ばした。コットンの靴下を透かして硬く冷たい感触が伝わるばかりだった。
三十分も爪先のセンサーは悪戦苦闘を続けただろうか。学の体感では三十分のはずが、いつのまにか上空は漆黒の底にうっすら青い気配をみせはじめた。
学は焦った。頬に汗の玉がいくつも並び、互いに結び合い流れて頬を伝った。
夢の中なのに込み上げてくる睡魔が耐え難い水位に達し、立って片足を上げたままウトウトしはじめた。その時いきなり足先から体はウオーターベッドに飛び込むかのようにやんわりと窓を超え傾いでいった。
気がつくと自室の固い煎餅布団の上だった。
――カギの掛かったガラス窓を通り抜け大井の部屋に入ることは不可能だった。つまりあれは現実のベランダ、いや待てよ、入ることはできたんだから最初は大井の夢の中のベランダ、そして途中から正真正銘のベランダに変わったんだ。
それにしてもベランダからの脱出には苦労したなあ。このことから考えるに、他人の夢を通って現実へと至る穴は広く、反対にその現実から夢へと引き返す穴はきわめて狭いということだな。
解決の具体的な糸口は見い出せなかったものの、貴重な経験を得たことで今夜はよしとしよう――

三度目の夜、三たび赤い扉をくぐった学は目の前に展がる光景を見て胸を撫で下ろした。昨日一昨日のベランダではなく、そこに映るのは大井の寝室、しかも画面の前方、ベッドの上にはほとんど見切れているが寝転ぶ大井の体の一部、Tシャツから伸びた腕、ジャージを穿いた脚が覗いていた。
――そりゃそうだな。毎晩ベランダの夢を見るはずもないし。
でも少し妙だな、夢にしてはあまりに当たり前、まるで今現在の寝室からの実況中継みたいじゃないか。
なるほどそうか。つまり大井は今まさに眠りに就こうとする瀬戸際にあり、半分閉じた目から見た景色がここに大写しされてるんだな――
そう思い至ると声を掛けるのはためらわれた。しばらく逡巡したのち、意を決して寝室に向けてぐっと腕を伸ばし、わずかに見える肩の断片に手を掛け軽く揺すった。
「霊の仕業か？　頼むから起こさないでくれ」
間延びした声はかろうじてそう聞こえた。学は画面ぎりぎりまで顔を近づけ、小声でそっと自分の名を告げた。

「悪いけど明日にしてくれ、電話するよ」
そういって大井は寝返りを打って向こうを向いた。
「お休みのところ恐縮だが、こちらも急を要するんだ」
学はベッドの隙間、大井の腕と脚の間に黒メガネを置いた。
「何？　よく見えないが……」
「伊達メガネ、お前のじゃない？　この前来た時忘れていかなかった？」
ベッドの上を彷徨っていた大井の右手がメガネの蔓に触れ、
「ああ、よかった、捜してたんだ。でもなんで、持ち出すはずはないんだが……」
それには答えず、
「しかし伊達メガネとは……一体何のために？」
問題の本質から遠ざかりつつあることに焦りを覚えつつも、大井を熟睡させまいとして訊いた。
「未だに子供が喜んでなあ。まだ小さかった頃、クリスマスには毎年……」
黒メガネを握っていた手がほどけ、ポトリとシーツの上に落とした。寝かせまいと学は大井の手にしっかりとメガネを握らせ、
「クリスマス？　それって一体……」
力なくフレームをなぞっていた大井の指が止まり、
「花はどこに行った？」
軽い寝息がその後に続いた。
ベッドの脇にはうっすらと小柄なクリスマスツリーが浮び出していた。金銀の星々やモールの飾り付け、トナカイや天使のぬいぐるみなどがはっきり見えはじめた。もう夢の領分にさしかかった証拠だった。
「花？　花ってどんな？　ベランダの花か、それともクリスマスといえばポインセチア……」
寝息は太いいびきに変わっていった。大井が左手に握りしめたままの黒メガネ、よく見ると左右のフレームの間に小さな三角錐が半透明からにわかに肌色を濃くしていく。
――鼻メガネだったか……――
これ以上の収穫はないと踏んだ学は赤いドアを開け、地下道を引き返した。
やがて向こうから地下鉄の前照灯みたいにまばゆい光がやって来た。近づくにつれますます大きくなって真正面から学を抱いた。真っ白な盲目にとらわれ、いつのまにかそれは自室の白い布団に変わっていた。
――これでもう疑いの余地はない。他人の夢という敷地を抜けて俺は離れた場所に瞬間移動し、そこから様々な物品を持ち帰り、あるいは置き去りにしてきたんだ。夢セラピーの助けがないばかりにそのことに無自覚、無知蒙昧で惰眠を貪りつづけたんだ。
でもだからどうしろと？　さしあたって今必要な品物は何一つ見当たらない。だとしたら俺はこの力をもって一体誰の夢に踏み入り、何を掴み取ればいいのだろう？――
誰かに面と向かって諭されているかのように、学は悄然と布団の上で正座し膝に手をのせた。
その後灯りを点けて鼻メガネの鼻パーツを部屋じゅう捜したが、結局見つからぬまま朝を迎えた。

六時半になると出勤の準備をするあわただしい時間の隙を縫って――失礼な時間帯ではないかと気を揉みつつ――杉田和女に電話を入れた。それ以降事務室でタイムカードを押すまでの約二時間のうち、電車内にいた時間を除いて十五分おきに掛け続けたが、結局繋がらなかった。
どうしても杉田先生の力を借りたくてたまらない学は、休憩時間が始まると全力疾走でロッカー室へ赴くとスマホを取り出し、そのままトイレに駆け込んだ。特に尿意や便意が急を要したわけではないが、個室が二つとも塞がってるのを見ると今か今かとどちらかが

開くのを待った。
班は違うが顔見知りの職員がすぐ後に入ってきて朝顔の前に立った。なんとなくその場の空気で学も隣に立ってチャックを下ろし、二人で談笑しながら用を足した。
洗面台の前でも仲良く並んで手を洗いながら、学はわざとゆっくり時間をかけて丹念に石鹸で爪先や指の股を擦ったり、それが済むと鏡に向かって髪を整えたりした。
「お先に！」
同僚の男がトイレを出ていったのを確かめると、学はやっと空いた個室に入りカギを下ろした。
トイレットペーパーで便座をひと通り拭い、ズボンを履いたままその上に尻を落とした。
杉田和女にリダイヤルしようとスマホを取り出す。画面を見るとメール着信の表示があった。麻紀からだった。
『十八日（日）は先約があって行けません。
由美ちゃんが代わりに行ってくれるからよろしく』
例の月一回の学の愉しみ、トミーとの面会のことを言ってるのだった。
――先約って、最初から毎月第三日曜日と決まってるじゃないか！――
由美とは、結婚当時同じマンションの上の階に住んでいた四十代の主婦で、学たちとは夫婦どうしの付き合い、無類の猫好きでトミーを可愛がってもいた。麻紀は今でも懇意にしているようだと初めて知った。
返信ボタンを押し、
『第四日曜日でもこっちは全然構わないよ』
と打った。送信ボタンを押そうとした指が止まった。
――あくまでトミーに会うのが唯一の目的、だったら由美さんでまったく問題なし、むしろ気詰まりでない分かえって有難いじゃないか――
さっき打った文字をすべて削除した。代わりに、
『いいけど由美さん迷惑じゃないかな』『わかった……また連絡する』『それで平気だけど、こっちも用事で行けないかも』
さまざまな文面を入力しては消すを繰り返した。結局『ＯＫ』を表す絵文字だけ送った。
気を取り直して杉田和女の番号を押す。「夜の就寝時でなければ……」という禁を犯し、三回鳴らして切りもう一度掛けた。
呼び出し音が止まり音楽が流れ始めた瞬間、掛け間違えたと思い電話を切ろうとした。いつもの曲ではなかったからだ。名作映画ファンである学にとっては馴染み深い曲、映画『ヴェニスに死す』のテーマ曲、マーラーの交響曲第五番第四楽章アダージェットだった。つい聞き入ってるうち杉田和女の声が混じった。
「今年も残すところあとふた月。もとより私たちがこれから訪れる眠りの国には季節や年次を問わず日々新たな発見や出会いが待ち受けています。そんなときめきを今一度心に刻めるよう、このお部屋も少し模様替えしてみました。
よく見てごらんなさい。壁紙もパッと一新されたでしょう？」
便座に腰掛けたまま条件反射で目を閉じていると、だんだんウトウトしはじめた。瞼の裏に、名前は知らないが秋の花らしき色彩が点々と散らばっていく気がした。
最初は微かにしかきこえなかったアダージェットが曲調の盛り上がりとともに次第に音量を強めていった。それに伴って投入される、いつもの地下一階へと誘導する杉田和女の声は一字一句これまでと違わぬ文言だった。
重い金属のドアを押し開け、居並ぶ彩りの扉の前をどれにしようか迷いつつ廊下を踏んでいると、
「待って！」
烈しい口調が学の足を止めた。
「漫然と探していてはいけないわ。あなたはこれまで、間違いとはいわないけれど遠回りの選択をしてきた。それはある意味近道でもあるけれど、今は正真正銘の最短距離を行く

べき時。……フフ、迷ってるでしょう。安心してゆっくり目を閉じて。実際には閉じてると思うけど、その場で立ったままもう一度目を閉じて。
それから目を閉じて廊下に立っている自分をイメージするの。……見えてきたでしょう？　そしたらそれを見ている自分の目をもう一度閉じる、それを何度も繰り返すの。
するとほら、小さな青い池が見えてきたでしょう。そして今あなたはルアー。
小さな深い底知れぬ池のほとりで釣糸の先に垂れたルアー、つまりあなたは水中深く身を沈めていく、そう、どんどんどんどん……」
自分の体を金属製の小魚の形としてイメージしようとした矢先、遠くの方でする些細な、だが現実の棘をもつ物音が学の意識を引っ掻いた。それは振動を伴いつつみるみるヴォリュームを高め、一気に学の視界を粉々に砕いた。
目の前でトイレの個室ドアが掛け金を壊さんばかりにガタガタ揺れていた。
「今出ます！」
反射的に水を流しながら学は言った。

その日の夜、例の廊下にすんなりとたどり着いた学は昼間トイレの個室で試みて頓挫したイメージトレーニングを再開した。
目の前に小さな金属製のルアーが揺れていた。それを凝視して己と同一化し、青く底知れぬ池に潜っていった。プールでのような浮力を感じることなく、ぐんぐん沈んでいった。
水深が進むにつれだんだんと息苦しく、一分とたたないうちに藻掻くような窒息感に変わっていくのは現実そっくりだった。必死に身をバタつかせようとするのだが、もとより固い鎧のような金属の体は意に介さず一定速度で落下することを止めない。その鎧にも周囲から押し潰すような圧力がますます加わり、口から内臓が飛び出しそうな烈しさだった。しかもその内臓は飛び出そうにも硬く冷たくわだかまって喉元まで込み上げ、思わず開こうとした口もピッタリ塞がれ一泡たりとも吐くことも吸うこともできないのだった。
こんな記憶が浮かんだ。ある夕刻、ひとり居間の畳の上に寝かされていた学は開け放した窓から吹き込んできた風に洗濯物のハンカチがハンガーから外れ、ふわふわ室内の宙を舞っているのを嬉々として眺めていた。
やがて風が止むとハンカチはあてどなく揺れながら急降下し、床すれすれでふいに軌道を変え狙い定めたように学の顔の上に舞い降りた。
塞がれた鼻と口からわずかな呼吸と悲鳴を繰り返したが、ちょうど揚げ物を始めた母親の耳に届かなかったらしい。折から吹いてきた微風にハンカチが飛ばされるまでその苦悶は続いた。
すると次から次へと年代順に、息苦しさに限らずこれまでの三十一年間に這うようにして耐え抜き、あるいは逃れようとしてきたありとあらゆる種類の苦痛苦悩が鮮やかな映像とともにかわるがわる眼前に立ち現れた。
……小学生の頃、姉の飼っていたセキセイインコが人まねでおしゃべりしては家族たちを喜ばせるのを見てその本能的なサービスを不憫に思い、少しでもリラックスしてくれたらと水がわりにこっそり日本酒を飲ませていたところ、ある日カゴの隅で冷たくなっていたこと。
……中学二年の頃、事ある毎に厳しく叱責する担任の体育教師に業を煮やし、級友と共謀のうえ高級寿司店に電話し、担任の自宅あてに特上握り十人前を出前注文したこと。その後しばらくの間、いつ真相が明るみに出、事態が大事に膨らむかと戦々恐々過ごす毎日だったが何事もなかった。
ある日曜日学が片手に自転車のハンドル、片手に齧りかけの串カツを握りつつ電器店へゲームソフトを買いに走っていると、ちょうど追い抜こうとした歩道上の男に呼び止められた。当の体育教師、服部だった。
うつむいて目を合わせぬままあいさつした学の肩をポンと叩くと、
「よう旨そうだな。俺にも一つくれよ」

言いながら服部は快活に笑った。
反射的に顔を上げると、別人と見違えるほど柔和な表情を浮かべていた。
服部は手動式の車イスを押していた。座席には小さな男の子が乗っていた。
「いくつに見える？　ずいぶん年下と思うだろ、けど君と同じ歳なんだ。今年までうちの支援学級に入れてたんだがな、思い切って来年から普通学級に通わせようと考えてるんだ。君らのようないい仲間がいるなら、そのほうがこの子もきっとうれしいだろ？　何かの縁があれば仲良くしてやってな。よろしく頼みます」
子供の頭を撫でながら言った。
学は自転車を下りて車イスの方へしゃがみ、子供の顔をのぞきこんであいさつをした。校庭をへだてた支援学級のある別校舎の付近でその小さな顔を見かけた気がした。学があいさつすると、焦点の合わぬ目を宙にさまよわせたまま、もつれた舌先から聞き取れぬ言葉を発した。
「田村君だよ。言ってごらん、タ・ム・ラ……」
服部は幾分毅然とした口調で一音ずつ学の名を繰り返すと、
「君らにいつもつらく当たってるだろ。もしそのことで傷ついてるんなら率直に謝る。どうか許してほしい」
服部は白髪交じりの坊主頭を何度も擦ったあと、深々と下げた。
「だが決して悪意からじゃないことをわかってくれたらうれしいんだ。君らのためを思って、将来君らが社会に出ても恥ずかしくない人間になってくれるよう、その一心で他意はないんだ。
だからこの子にも――君らと同じかそれ以上に厳しいしつけを心がけてる。今は出遅れてるが、いつか君みたいな素敵な男になってくれると信じて。まあ、すぐにはムリだけど」
照れ臭そうに笑うと、
「引き止めて悪かったな。急ぐんだろ、さあもう行けよ」
学の背中を力強い手でグッと押した。
翌日学は頭痛と吐き気を母親に訴え、学校を休んだ。仮病の床の中で閉じた瞼に服部の笑顔とその息子の顔が交互にフラッシュバックした。激しい贖罪の念とは裏腹に、来年度服部の息子と同じクラスになりませんようにと神に祈った。
案の定、三年生一学期の始業式の日、廊下の掲示板に貼り出されたクラス別の名簿には学の所属する二組の欄に『服部未来』の名があった。
街中で出会ったあの日のことを憶えているのか、教室で顔合わせするや服部未来は片足を引き摺りながら学のほうへにじり寄ってきた。茫漠とした眼差しにハッとするほど澄み切った光が射し、
「タ・ム・ラ……」
あるかなきかの滑舌で、だが学にははっきりそう聞こえた。
その日を皮切りに卒業式まで、未来はまるで兄弟のように学になついて離れなかった。その様子を初日から見守っていた担任の女性教師は未来の席を学の隣に据え、学期ごとの席替え時も二人の席だけは変えず、そのことにクラスメートの誰も異論はなかった。
……進路指導の薦めよりワンランク上の公立高校を受験し、幸運以外の何物でもなく合格した学は、その頃永年の家庭内別居からとうとうシングルマザーへと舵を切った母に、ほとんどが１でたまに２が混じる一学期の通知表を見せるにしのびなく、パソコンに詳しい友人に厚紙を渡し３～４の数字に偽造してもらった。それはいかにも短絡的で早計だった。
二学期の中間テストを終え母親、担任を交えた三者面談のさい、言うまでもなく不振だったテストの成績に言及しながら担任は、
「もう少し頑張れるはずですが……」
手元の書類挟みの中程から通知表を抜き取り、おもむろに開いて眺めた。学の心臓は早鐘を打った。

その紙質や印刷の微妙な違い、母親から見えるか見えぬ角度でのぞく一学期の欄に打たれた小さな数字の列。学は見る人を石に変える怪物の面であるかのように恐る恐る母親の顔を盗み見た。母親に変わった気配はなく、終始いつもの天真爛漫ともいえる陽気な振舞いを崩さなかった。

学校からの帰り、スーパーに寄り二人で夕飯の食材を選んでいる時もそれは変わらなかった。

「久しぶりにすき焼きでもしようか？」

そういう母の言葉をきいて学の安堵は完全なものになった。

家に帰り着いてからも相変わらず鼻唄を歌いながらてきぱき調理する母親を見ているうち、まだくすぶっていた罪悪感も空腹に席を譲った。

すべての食材を投入し、芳香を漂わせながらぐつぐつ煮え始めた卓上のカセットコンロに据えた鍋を差し向かいで挟んだ。生卵を小鉢に割り入れ、いざ箸をつけようとした時、ふと母は、

「食べる前にちょっと聞いて」

頬を白くするほど強張った顔が目前にあった。

みるみる充血していく目を真っ直ぐ学の顔に据えながら、勉強もスポーツも不得手でよい、その他どんなことが出来なくても興味を持てるものが何一つなくてもいい、ただ人に説明できないことをしてはいけない、何より将来の自分自身に説明のつかないことをしてはいけない、なぜかって……。

切々と諭す母の姿を見ているうち、むらむらと余りに理不尽な怒りが込み上げてきた。

やがて涙を拭った母が吹っ切れた笑顔をみせ、

「さあ、お肉もういけるわよ」

聞いた瞬間、学はドンと勢いよく拳で机を叩いた。

思いのほか強く揺れた机上でカセットコンロの五徳から滑り落ちた土鍋は、ハッと突き出した学の手より早く横転した。ちょうど火加減を緩めるため前屈みに火口に寄せていた母の顔に、煮えたぎった汁が具材もろともザーッと雪崩落ちた。焼き豆腐が額を滑り落ち、髪にそこだけメッシュみたいに糸こんにゃくが絡んだ。母は声一つ洩らさず蹲った。全治二週間の大火傷だった。

……すぐには働きたくないという理由だけで、実質入試は面接と作文だけの四～五流といわれる某大学に入学した。（詳しい金銭事情は明かされなかったが、母親の預金を根こそぎ崩しても入学金授業料一年分に届かず、元夫に助力を求めたようだ）入ってみるとなるほど同期は学と知的レベルでほぼ同水準、ようやく安住の地を見つけたかに見えた。

だがそこにはさらに厳しい格差社会、つまりは恋愛格差が存在していた。語学クラスで意気投合した男二人は共に彼女持ち、そのことを前提にして、

「買い物付き合うのってどう？」

「喫茶店は一時間が限界だよね」

など合意を求めてくるものだから、そもそもいませんと打ち明ける契機を奪われたまま、気がつけば架空の恋人を捏造し続け、四季折々のデートコース、関係の進展に合わせ諸々の仲違いや仲直りの模様を主に日本の青春恋愛映画をベースに創作し続けた。

夏休みに入ろうとする頃、当然のように恐れていた事態が訪れるべくして訪れた。

「トリプルデート行こうよ！」

爽やかに発した友人の一言にもう一人もすぐさま同調、

「彼女、人見知りだから……」

やんわり断った学だったが、

「大丈夫。俺の彼女、そういう子に心開かせるの得意だから」

日程調整の段になって様々な用事を口実になんとか引き伸ばし続けたが、夏休みへの突入とともに万策尽きた。

七月終わりのとある平日に二人が設定したトリプルデートをとうとう了承してしまう

と、その日から学の懊悩ははじまった。なすすべもなく近づいてくるその日を前に、このまま当日を迎えてしまえば希少な友人すら失ってしまう危機感から、意を決して当日の三日前「大事な話」と称し二人をカフェに呼び出した。
「言おうとしてずっと言えなかったんだけど、実は俺……」
今にも口から出ようとした真実の告白はその瞬間、内気な小動物みたいに身を翻して舌の奥に引っ込み、その代わり、
「とっくに彼女と別れてたんだ……」
二人は全く疑う風もなく、むしろ、
「まあ、巡り合わせかもな……」
「まだ引き摺ってる最中だろうから無責任には言えないけど、そのうち新たな……」
真摯に慰めたり励ましたりを二時間ばかり続けた。
夏休みを終え講義が再開してからも二人の恋愛指南はますます熱を帯びた。
ある日の午後、また三人で学校付近の中華料理屋で昼食を摂っていると、
「ところでお前、常々趣味の合う子が一番、って言ってるよな」
学の本音としては、女性に縁遠い男性の常として縁のない月日がかさんでいくにつれ女性に対するハードル、外見への審美眼だけが自らの容姿を棚上げしてまでも、ますます厳しく研ぎ澄まされつつあった。
だが正直にそうとも言えず、かといって「性格や相性を重視」というのもあざとく思われ、中庸的に「趣味の合う子が一番」とお茶を濁していたのだった。
「それならいい子がいるんだよ」
何でも友人の彼女がバイト先のネットカフェで知り合った先輩スタッフで、映画とくにホラー映画に関してはフリークと言えるほど熱烈なファンだという。
「一度会ってみろよ。まずは友達からでいいじゃない」
早くも雪解けの春が訪れたかのような温かい声援を受け、また学自身決して淡くない期待を胸に、明くる週末友人とその彼女を交え、四人で遊びに行くことになった。
待ち合わせ場所は郊外のさほど客足のない小型遊園地の入り口だった。待ち合わせ時刻の一〇時より五分前に行ってみると、三人はもう来ていた。
友人とその彼女に挟まれ立っていたのは小柄な二人よりさらに背の低い女性だった。暗い色のパーカーとパンツ、いわゆる収縮色だが全体に丸い印象を与えた。パーカーのフードを被っているのが何となくゴルフ場のキャディー、もしくは周囲に野山が展望できるせいか農作業従事者を想起させた。
学は胸内から空気が抜け、肺がしぼんでいくのを感じた。挨拶するとその女性、飯村尚美はニコリともせず黙って頭を下げた。
いよいよ遊園地巡りが始まると、飯村尚美は、
「乗り物は苦手だから」
とどのアトラクションの前でも尻込みし、乗り場の行列の中へ紛れていく友人カップルを仕方なく学も一緒に見送った。待ってる間も尚美の口数は少なく、大学生活にまつわる面白おかしい話を学が披露しても、
「そうなんですか」
「凄いですね」
の繰り返し。学の心象はますますぐったりとその場にうな垂れた。
結局そのままの低調なムードで遊園地はお開き、居酒屋で食事して帰ろうということになり、ひとしきり飲み食いしながら次はどこで遊ぶかの話題になった。
映画でも観る？　友人の言葉を皮切りにどのジャンルにしようか？　いざホラー映画に飛び火したとたん、それまで鍾乳洞のようだった尚美の目がいきなり輝き、堰を切ったように言葉が溢れた。
その後四人で映画に行ってからは、友人の、
「彼女、強引に誘ってほしいタイプだから」

との友人からの度重なるレクチャー、それに紹介してくれた友人の彼女への気兼ねから、心ならずも学は尚美をデートに誘った。
意気投合するのはホラー映画のみ、それほど上映してるわけでもないから、何の気なしに学は「部屋にＤＶＤ観に来る？」と誘ってみた。その時は返事を濁した尚美だったが、その日の深夜メールで「行く」とだけ書いたメールが届いた。
それからお互いの部屋を行き来するようになり自然と寝泊まり、二十前後の女性特有の華やかな魅力には欠けるものの、手慣れぬ料理を練習し始めるなど気立てのよさが垣間見えた。学としても決して心弾むことはないもののイライラすることも減り、これまでにない落ち着いた気分を得て、各方面の知り合いにも彼女が出来たと報告していた。
その頃学はファミレスの厨房でバイトしていた。当初昼勤だったのが深夜に欠員が出たのでどうしても回ってくれとの店長からの懇願で致し方なくシフトを変えた。
入ってみるとパートナーであるホール担当の三十代の人妻は接客態度こそ丁重で人気があるものの、厨房に回れば罵詈雑言を吐く店長にとってさえ腫れ物の存在、深夜枠のキッチン担当が入るそばから辞めていくのは彼女が原因だった。
学も最初のうち持ち前の愛想笑いでなんとか凌いでいたもののすぐに力尽き、いよいよ店長に昼勤への復帰もしくは辞意を表明しようかと思い悩んでいた矢先、天の僥倖か彼女が出勤途中、自転車から転倒し骨盤骨折、長期リタイアとなった。
交替で入った服飾専門学校生Ｍに初めて会った時、学は我が目を疑った。深夜のファミレスはおろか、面接は外見重視のお洒落なカフェの店員にもなかなかお目に掛からないタイプだった。
聞けば実家が裕福でないため学費は自前、昼は授業が過密でバイトは無理なので時給もいい深夜枠にしたのだという。
昼勤夜勤のメンバーからは深夜勤への希望者が続出、そのうちの数名から学は直談判されたが頑として跳ね除けた。
冷たく整った外見とは裏腹にＭは意外に人懐っこく、間口の狭い学の話も自然な会話の流れの中で広げてくれ、学もまた例えば映画の話題に及ぶとコアな嗜好を封印しＭ同様自分も『ハリーポッター』や『パイレーツオブカリビアン』の大ファンだと変節した。
そのうちにバイト明けは共に朝食へ、二人とも授業のない土日はＭのショッピングに付き合ったりカフェ巡りの日々が始まった。
尚美には「ゼミのレポート提出が迫ってるから図書館で勉強してくる」など適当な言い訳をした。尚美は黙ってうなずいた。
深夜バイト、それに続くＭとの朝食から帰ると、尚美はもう部屋を出たあとで机の上にはスクランブルエッグなど簡単な朝食が用意されていた。最初のうちそれを授業のない日は昼食に食べたり、夕食の一品としていた学だが、そのうちスーパーのレジ袋にそのまま投入し、ゴミ袋の奥深く沈めるようになった。
尚美が泊まりに来てる日はＭと別れたあとも外で時間を潰してなるべく帰りを遅らせるようになった。ある日の昼過ぎ、部屋に戻ると机の上に尚美に渡していた合鍵が置いてあった。手紙はなかった。その日もそれ以降も尚美から電話やメールはなく、学からも連絡しなかった。
合鍵はＭと二人で選んだキーホルダーを付けてＭに渡した。そのＭが今年一月に別れた妻、麻紀だった……
……いつのまにか物理的な息苦しさは消えていた。そのかわり胸の中でさっきまで鳴り響いていた濁ったどよめきの余韻に耐え目を閉じている自分を発見した。
――死に瀕した時、人はそれまでの生における重要シーンをほぼ漏れなく振り返るというが、じゃあさっき俺はまさに死の危機に直面していたのか？　もしかしてもう死んでいるのか？
そんなはずはないな、どうせ寝ているうちに頭から布団を被ったせいで息苦しくなった

だけ。今目を開けたら、何も変わり映えしない俺の部屋の天井が見えるだけさ――
目を開けた。意外にもそこはあの夢の中の廊下、いくつものガラス扉が並ぶあの通路だった。
――でもこの期に及んで一体どの部屋を選べば……――
耳を澄ませてみても館内放送みたいな上方からの和女の声は聞こえなかった。
――さっきまで見ていたあの苦悩の走馬灯、努めて厳重にフタをし直視するのを避けてきたあの記憶のゴミ集積所はいったい何を意味するのだろう？――
学は床の上に尻餅をつき、膝を抱え考え込んだ。
何も思い浮かぶことなく立ち上がり、扉一つ一つの前で立ち止まっては擦りガラス越しに揺れ動く影を追いかけ、思考を巡らせた。
そんなことを繰り返し廊下を右往左往するうちに、実はそれが核心を迂回し解決を先送りするための遅延行為であることが自分でもわかってきた。
最初からわかっていたのかもしれない。考えるまでもないのだった。
さっきから一度も足を止めることなく何度も行き過ぎたひとつの扉を学は眺めた。
そこだけシャッターが下りている間口、全面に白いスプレーで漢字や崩したアルファベットやイラストが殴り書きされていた。上隅に薄くクモの巣が張っている。もう長いことシャッターを閉じている証拠だった。
ところが、鍵穴にカギが刺さったままだった。
――いかにも『あえてお勧めしませんが、どうしてもというならお通しするのにやぶさかではありませんよ』と耳打ちするようなこの佇まい。この吐き気を催すほど慇懃無礼なあざとい擬態――
学のほうも何気ない風を装ってあらぬ方へ目を逸らせつつ近づいていった。
二つある把手の窪みに両手を掛け、グッと引き上げる。ビクともしない。試しに刺さってるカギを反転させ、もう一度上方へ向け指先に力をこめた。だらしない笑い声みたいな不快な音を立てシャッターは開いた。
依然として見るものを悄然とさせる外観がそこにあった。元は無色透明だったはずの、すっかり黄ばんで雨滴の跡が汚れた点を残す飾りガラス。ひび割れたのか斜めにガムテープが貼ってある。そのガムテープの上には太いマジックで卑猥な落書き。
だがもはやためらうことなく学はドアノブを回した。向こう側から誰かが押し返しているみたいな抵抗を受けつつ、扉は耳障りな軋み音とともに内側に開いた。
これまで通り浮薄な靄のような空気にぼかされてはいるが、それがどこかすぐにわかった。同棲時代を経て新婚当時まで、二人でよく入った家の近所の喫茶店内だった。
かつてはあれほど甘美だった光景が以前と変わらぬ親しみをこめて学を迎え入れようとしていた。
今では二度と足を踏み入れまいとしてる空間……学はとっさに踵を返そうとした。
「いらっしゃいませ！」
店員の元気な声かけに、
「アッ、一人で」
思わず返してしまった。だがどうやら学に対してではないらしい。どこからともなく視界内に立ち入った女性客二人が窓際の席に座ると、店員は水の入ったコップとメニューをテーブルに置いた。
学に一番近いテーブル、手を伸ばせば届く真正面の席は空いていた。そこは店のドアから入ってすぐの席、たいていいつも空いていて、なぜか麻紀はその席を好んだ。
テーブルクロスのせいかもしれない。席ごとに違う柄、そこは赤と緑のギンガムチェックだった。
水の入ったコップが一つ、その上に載っている。この部屋に入った時から始まっていた動悸を伴う目まいが刻々と募ってきた。早まった脈搏が部屋全体にこだましている気がした。

店の奥に掛かる短いカーテンの向こう、厨房と隣り合わせの一角からサンダルを履いた足がのぞいた。カーテンがめくれ、先月は猫カフェで会っていないからおよそ六十日ぶりに見る麻紀の姿がハンドバッグを手にテーブルの間を足早に近づいてきた。

水の置いてあるテーブルの向こう側に麻紀は座った。落ち着かない様子で腕時計に目を走らせた。

――時間帯からすれば、今ここに映されてるのはリアルタイムの現実ではないはず。だとすれば今現在眠っている麻紀が見てる夢、もしくは醒めたまま見る夢想にちがいない。いったいどんな心持で見てるんだろう？　少なくとも俺にとっては悪夢でしかないが……――

だが麻紀の表情は活き活きと弾み、思わず洩れる含み笑いを隠せない。

今まで気づかなかったが、よく見ると麻紀の向かい側、学の立っている方のテーブルクロスの端に、ほとんど見切れているがコップの断片がのぞいていた。

そのとき店員が来て、トレイから麻紀の前にティーポットとティーカップを、学の立つ傍にはコーヒーの入ったカップを置いて立ち去った。

――まさか見えてるのだろうか？　俺の姿が……――

ありあわせの勇気を鼓舞し、声を掛けた。

「やあ、待たせたね！」

呼応するように麻紀が何か言った。その声は全く聞こえない。店内にいる他の客たちの話し声や笑い声、低く流れるイージーリスニングや食器のたてる物音は現実そのままに聞こえるというのに。

しきりに麻紀は堰を切った様子で何か言い続けている。その視線は学に向けられているようであり透過しているようでもあり、あいまいだった。

そのうち麻紀は口をつぐみ、紅茶をカップに注ぎ始めた。取り繕うように学は、

「知ってると思うけど、外でタバコを吸ってきたんだ。この店は全席禁煙が唯一のネックだね。

仕方なく携帯灰皿を手にその辺の路上で吸おうとしたら、二階の窓がガラッと開き、

『子供が見てるから吸わないで！』

と怒鳴られ、歩くこと十分、駅前の大型喫煙所へ。それでこんなに遅くなってしまった」

麻紀は笑いながらスプーンを回し、また何か言った。自身の発言に対するものだと学は信じて疑わなかった。

その後も聞こえない麻紀の声にうなずき、合いの手を入れるように過去の記憶を頼りに昔言ったのと同じことを同じ言い回しで言い、ややずれてるようにも映る麻紀の反応を自分のものと思い込むうちに、ある甘美なものが学の胸の内に流れた。

それが次第に苦みを帯びようとする前に、学はキッパリと断じた。

――あくまでもこれは現実ではない。過去の美しい面影だとしても、未だそれを麻紀が抱えているのだとしても、タイムスリップでもしない限りそこに戻ることはできない。

今わかったことだが、夢に溺れるためでなく、夢を変型し現実へと溶接するために俺はここへ来たんだ。一刻も早く現実に戻って対策を練り直そう――

学は喫茶店の幻影の中にグッと右手を突き入れた。コーヒーには手をつけず、その横のグラスを掴むと胸元に引き寄せ、一息に飲み干した。もはや驚くことでもないが、水は水だった。

出ていこうと後ろ手にドアノブを握った学の目に、バッグを探っている麻紀の姿が映った。あわてているように見えた。

取り出したのはスケジュール帳だった。ページをめくり、今月の予定表を開くと備え付けのペンで空白になった来週の水曜日の欄に〇を書いた。その中に今いる喫茶店の名前と18：30の文字を書き込むと、「よし！」と言うようにうなずき、パタンとスケジュール帳を閉じた。

次の週の木曜日、田村学は物流センターの仕事を休んだ。有給休暇の申請は間に合わなかったので、罪悪感に苛まれつつも当日の早朝本社の人事課にメールし、その後早番の社員が出勤しはじめる午前七時過ぎ、物流センターの事務所に電話で欠勤を伝えた。

案の定電話に出た前田は「……ハイ」とだけ言ってすぐさま電話を切った。

とはいえ当日いきなりラインに穴を空けるのは気が引けるため、二日前からお膳立てはしてあった。火曜日には仕事中マスクをし、時折軽く咳をした。水曜日にはやはりマスク姿で昨日より咳はより激しく音質も肺の奥でこもった感じにし、頻度も増やした。同じラインの作業員からは、

「大丈夫？」

何度も声を掛けられ、帰り際チームリーダーから、

「無理すんなよ。もしも明日ダメならすぐに電話くれよ」

そう言われた時は心の中で快哉を叫んだ。

欠勤の連絡を無事終えた今、さすがに自らの姑息さにいたたまれず髪を掻きむしった。それだけになお、こんなことは今日が最初で最後、

――なんとしてでも今日中に解決の糸口を見つけなければ。

いわば転轍機を手に入れ、『人生という名の列車』の路線変更をし、明るく暖かな陽光ふりそそぐ方面へと向かわなければ……――

そう思いつめ、ギュッと拳を握った。

軽めの朝食を摂り、昼食は抜いた。常備薬を入れた戸棚を探り、睡眠導入剤を見つけた。離婚手続きのさなか慢性的な不眠症に陥り、医師から処方されたものだった。

午後三時半を過ぎると、朝入浴したのにもう一度シャワーを浴び、四時には布団を敷いた。いつものヘッドフォンを耳に装着し、導入剤を二錠飲むと布団に入った。

だがすぐに起き――寝間着がわりのジャージから一番ましな私服に着替え――その服装のまま再び布団に潜り込んだ。

いつもの入眠が一歩一歩階段を下りていくものであるなら、まるでスロープを滑るように眠りに落ちていった。杉田和女の声も傷ついたＣＤみたいに音が飛び、地下室へと至る過程も動く歩道のように自力を要さなかった。

鉄のドアを開け廊下へと足を踏み入れる。先週と同じ扉の前に立った。

今日はシャッターを下ろしていない。そればかりかガラスを横断していたガムテープは剥がれ、そこにあったはずのひび割れもきれいに修復されていた。黄ばんだ染みや汚れも洗い落とされ、簡素で古びてるとはいえ、無色透明なツヤを湛えていた。

ドアノブを回すと、これも先週とは打って変わって滑らかに開いた。

部屋の中は予期したとおり行きつけだったあの喫茶店が映されていたので学はホッとした。先週とちがうのは窓の外がすでに薄暗いことだった。

――するとこれは今現在の正真正銘の現実風景だろうか？

そりゃそうだなあ、まさか五時前から眠るわけじゃあるまいし……。

でも変だな、もしこれが実際に麻紀の意識内のどこかに映る景色だとすれば、これまでの慣例からすれば麻紀の姿はもうすでに店内にあるはずなんだが。

それにもし仮にこれが麻紀の目を通して見ている景色そのままだとすれば、画面手前に麻紀の手や持ち物、例えばハンドバッグからスマホを取り出すしぐさの一部が映り込んでもよさそうじゃないか――

店内を隈なく見回してみたが、麻紀の姿はかけらもなかった。

それに今気づいたのだが、先週と同じ店ながら学から見えるアングルはこの前とは正反対ということだった。つまりは先週麻紀が座っていた席から、学は店内を眺めているのだった。そのため今日は店の奥ではなく、玄関のドアがテーブルの向こうにはっきり見えた。

同棲時代のようにまたトイレで化粧を直しているのかもしれないと思いつき、待つことにした。

睡眠導入剤のせいか、どこか意識は鋭く醒めている部分とフワフワと覚束ない部分に分

離し、いつもの体内時計は正常に機能していない。優に一時間半が過ぎたようにも、まだ十五分しか経っていないようにも思えた。
今何時だろう？　店内に時計がないことはわかっていた。眠りに落ちるどこかのタイミングで離してしまったのだろう、手の中にスマホはなかった。腕時計をはめてこなかったことを後悔した。
あてどなくじりじりと時をすり減らしているうちに、ある恐ろしい考えが脳裏に閃いた。
――待てよ、ひょっとしてこれは麻紀の夢でも生身の現実でもなく、俺自身が今見ているただの夢に過ぎないんじゃないか？
だとしたら先週の夢も……――
学はガックリとその場に膝をついた。暗澹たる気分のせいか、喫茶店内の光景が心なしかさっきより白濁して見えた。それなのに意識はさっきより冴え冴えとしている。眠りが醒めはじめてるのかもしれないと気づいた。
その時入り口のドアベルがカランと鳴った。
「いらっしゃいませ！」
戸口に立っていたのは麻紀だった。ドアを閉め中に入ると、店内を見回すことなくまっすぐ視線を学の前のテーブルに向けた。
すぐさまハッと目を輝かせ、足早に近づいてきた。
左腕にはケリーバッグ、右手には籐製の大きなカゴを提げ、凝った巻き髪、見たこともない綺麗な色のブラウス・フレアスカート、リボン付きのハイヒールを鳴らして。
――これでもう間違いない。今ここにあるのは紛れもない現実だ。
なぜならかつて俺がプレゼントしたケリーバッグ以外、すべて見たことのない高級そうな出で立ちだから。俺の妄想を孕んだ夢であるはずがない。なぜならこのような素敵な装いを想像できるファッションセンスは俺にはないのだから――
それでも拭いきれぬ不安は残った。
――今もそして先週もそうだが、まだ喫茶店内の空間に立ち入っていないのに、彼女はなぜ俺に気がついたそぶりを見せたのだろう？　何かの力が作用して彼女にはまだエリア外に立ってる俺が見えているのだろうか？
もしかすると平安王朝の女性たちのように、麻紀もまた夢の中での逢瀬と現実のそれとを同一視し、今も俺が来ていることを信じ切っているのだろうか？
どちらにしてももう時間がない。勇気を振り絞って現実に足を踏み入れなければ――
学は片足を振り上げ、テーブルの横の狭い通路めがけ突き刺した。グニャリと爪先の周りの空気はわらび餅のようにひしゃげ、そこにできた凹みを両手で押し拡げながら全身を潜り込ませた。バリバリと雷鳴と嵐に見舞われたかのような轟音と風圧が学の体を押しひしいだ。思わずテーブルに片手を突いた。
「アッ！」
テーブルの上に液体がこぼれた。何かがそのそばで揺れていた。さっきまで水の入っていたらしいコップが横転して揺れていた。
その瞬間、とっさにコップを立て直そうとする学の右手がぼやけ、枝分かれするようにもう一つの手が現れ、コップを握った。
それからスーッと――まるで蛹から孵化する幼虫のように――学の胴体から二重写しになった形が離れ、みるみるはっきりした色と形を具え始めた。
それは学の錯覚にすぎないとすぐにわかった。実際には最初から座っていたのだと気づいた。いま学の横に立つ黒いスーツを着た男は。
「ごめん、濡れなかった？」
男が言うと、麻紀は笑って首を振り店員に台拭きをたのんだ。
あわててやって来た店員がテーブルを拭っている間、学は顔を伏せ一歩ずつ後ずさりながら、さも間違えて隣のテーブルから来た客のように、それ以前にさも田村学とは瓜二つの人物であるかのような面持ちを作り、少しずつその場を離れようとした。だがそれも杞

憂だとわかった。
店員が立ち去ったあと席についた二人は、まるで最初から学など存在しないかのように談笑をはじめた。試しに学はもう一度近づき、もう一つある男の横のイスに腰掛けてみた。
「ディナーは別の店で、ここはお茶だけにしよう」
男が言うと、麻紀は微笑を滲ませ黙ってうなずいた。
「はたしてここはどのような世界に属するんだ？　この世界で俺は無色透明な存在なのか！」
あえて大声に出して言ってみたが、二人の反応はなかった。
「それより早く出してあげなよ。この店持ち込み可なんだろ」
男が言って麻紀の足元を指差した。麻紀が手に提げてきた丸みを帯びたログハウスのような形のバスケットが床の上にあった。
麻紀がフタを上げ、中から茶色いグニャッとしたものを持ち上げると、テーブルの下から男に渡した。
「やあトミー、久しぶり」
男は両手でトミーをギュッと抱き締めると、きれいに刈り揃えた頬ひげにトミーの顔を擦りつけた。トミーは目を細め、両耳をだらんと下げ男の頬や鼻の周りを舐めた。
「しばらくここでじっとしておいで」
男が膝の上にのせると、やや太り気味のトミーは鏡餅のように丸まり、背中の肉に埋もれるように載った顔は学のほうを向いていた。
「やあトミー、久しぶり」
力なく学は言い、トミーに向けて手を振った。
ほとんど閉じていたトミーの瞼がキラッと白く光った。とたんに男の膝の上で手足を伸ばし立ち上がったトミーが尻尾を高々と振りかざした。恐ろしく甲高い、まるでガラスどうしが擦れるような唸り声を上げると、同時に背中の毛が総立った。
「おい、どうしたんだトミー、ここには何もいないじゃないか」
撫でようと首に回した男の手をブルッと全身を痙攣させ振り払ったトミーは、カッと黒い両目と真っ赤な口を開け、獰猛な獣のように学に向かってうなり声を上げた。